

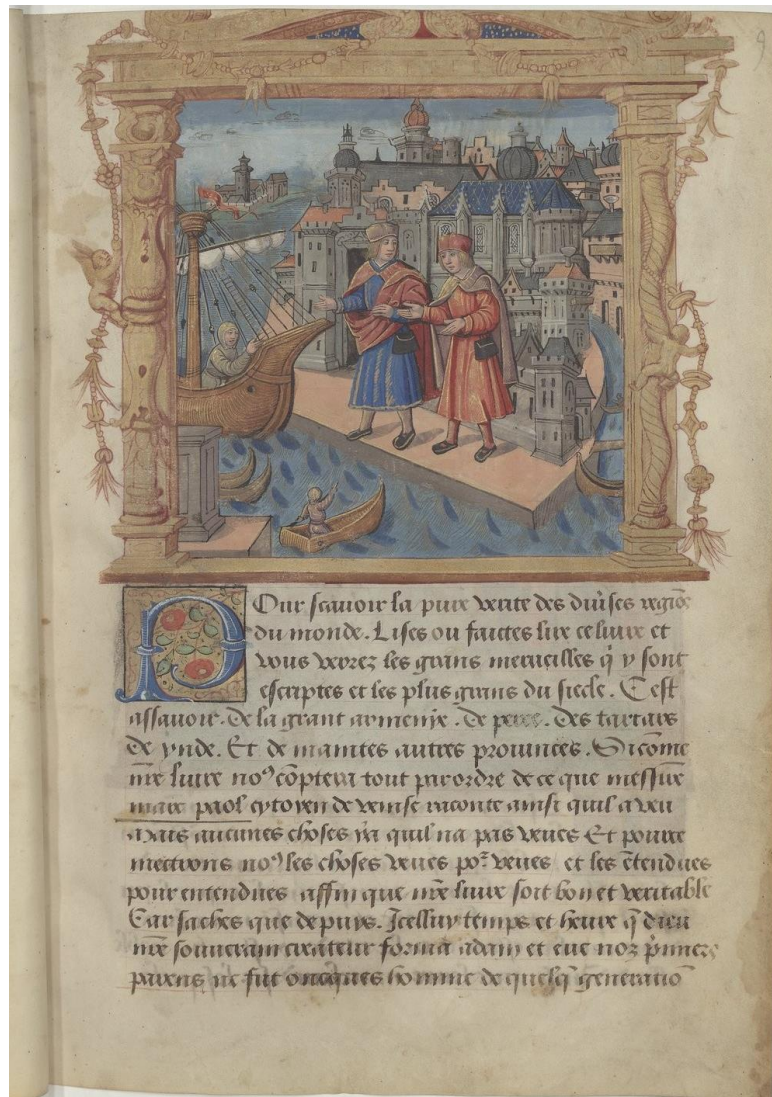
年次考¹⁾

図1 ヴェネツィアを発つポーロ兄弟 (BNF fr. 5219, f. 9r)

1 誕生時から出発時（1254-1271）

< c. 1254 誕生 >

記録によって確実なのは唯一死亡の日、「1324年1月8日」である。遺言状では「1323年1月9日」となっているが、これは当時のヴェネツィア暦では3月25日に年が新たまったのと、「9日」となっているのは公証人の記録では日没後の件は翌日扱いとなったためである。後の文書ではいずれも「8日」となっている²。したがって、死亡は1324年1月8日（日曜日）の夕方以後となる。あとは全て、旅行記に基づくか他の文書から推定するほかない。例えば、生まれたのは1254年ということになっているが、これとて前後から計算すればその頃になると言うにすぎず、確かな証拠は何もない。その上、かの書には多くの写本があり、テキストによって記述が異なる。

旅行記に基づいて再構成すると今では一般に、父ニコロと叔父マッフェオがコンスタンティノープルを発って第1次東行に出発したのが「1260年」、アークレに帰り着いたのが「1269年4月」、故郷に帰って「2年間」留まったのち、マルコを連れて第2次東行に出発し、「26年」にわたる旅行のすえ、ヴェネツィアに帰り着いたのが「1295年」、そしてその書がジェノヴァの獄で成ったのが「1298年」、とされている。ただしこれら年代のうち、ほとんどの写本で一致した確かと見なされるのは最後の二つだけである。最初の頃は父と叔父の旅行に関わるものか、マルコがまだ少年だった頃のことで、不確かなものもいた仕方ない。

家族の文書としては生前のものでは、1280年(8.27)の叔父の老マルコ（父ニコロの兄）の遺言、1300年(8.31)の腹違いの弟マッフェオの遺言、1310年(2.6)の叔父マッフェオの遺言がある。マルコの名が記載されている公文書としては、1305年(4.10)の大評議会の議事録があるが、これは叔父マルコのことと見なされるようになった。裁判記録としては、1311年(3.9)の麝香の販売代金をめぐるもの、1306年(3.16)と1319年(9.10)の従兄弟ニコロ（とその子マルコリーノ）との間の貸金と家の所有権をめぐるものが残っている。その他親族の裁判記録は数多い。また、日付は1366年(7.13)であるが、マルコの死後すぐの遺産目録が残っている。

これらから、生まれたのは、父ニコロがヴェネツィアに帰ってみると、「妻はすでに亡くなっており、マルコという名の15歳になる一人の息子が残されていた」とあり、父が帰ってきたのは1269年頃と考えられるところから、逆算して1254年となる。母の名は分からない。家がどの地区にあったかも明らかでない。

ところが、父と叔父が第1次東行から帰ってきたのはいつか、本当は明確でないのである。1269年というのは後世の計算である。主要稿本では、F（パリ地理学会のフランス語版）とFG（ポーチェのグレゴワール版）は「1260年」、TA（トスカナ語版）やVA（ヴェネツィア語版）やP（ピピーノのラテン語版）は「1272年」となっている。しかしこれらは、その前後の記述と状況からして、明らかな間違いと考えられている。アークレに着いた二人はそこで「教皇クレメンス4世がみまかった」ことを知ったとあり、ヴィテルボでの同教皇の死は1268年11月29日のことだからである。また2年後、2回目の東行のためアークレ滞在中に次の「グレゴリウス10世」が選出された(1271.9.1)こととも合致する。「4月」というのは何故か全てのテキストで共通し、したがって彼らのアークレ着は1269年となる。事実、R（ラムージョのイタリア語版）だけは「1269」年となっており、後世16世紀の編者ラムージョ(1485-1557)が史実に照らして校訂したことを示している。

そして二人がヴェネツィアに帰ってみると、そこには「15歳」になるマルコがいた。これは全ての写本で共通するし、おそらく物心ついて初めて父の顔を見た時の自分自身の年齢のことだから、ほぼ確かであろう。1254年生誕というのは、こうして導き出された数字である。ただ、父と叔父が帰ってきたのが1269年というのは動かせないにしても、その時マルコが正確に15歳であったかは分からない³。その場合は違ってくるが、大きなずれはないものと見てよい。Rでは「19歳」となっているのは、後にみるが、多くの写本では父と叔父のコンスタンティノーブル出発が1250年となっているのにラムージョが合わせた数字である。父ニコロの年齢は分からない。祖父はラムージョによると、「サン・フェリーチェのアンドレーア・ポーロ」だが、彼が見たというその記録は失われて今はない。⁴

1254年とすれば、コンスタンティノーブルが征服されてちょうど50年、しかし弱体化する皇帝権力と、ニカエアとエピロスのギリシャ人政権の攻勢の前に衰退を隠せなかったロマーニア帝国も末期である。前年1253年にはドージェがマリーノ・モロジーニ(1249-53)からラニエーリ・ゼン(1253-68)に代わっている。比較的平穏だったそれまでと違って、この年ジェノヴァとの和平条約は更新されず、その後両市の関係は悪化の一途をたどり、1258年のアークレでのヴェネツィアの勝利をはさんで、1261年のラテン帝国崩壊へと向かってゆく。レヴァンテをめぐる情勢が急を告げ始めた頃である。

そうして身ごもったあるいは生まれた子を残して、父がいつヴェネツィアを離れたか、マルコの誕生前か後かははっきりしない。誕生前とされるのは、Pに「妊娠中のまま残していった妻が、亡くなっていた」とあり、その文がRでも採用されて広まったからである。他のテキストでは全て単に、「亡くなっていた」である。したがってピピーノの加筆と考えられるが、こうした個人的な詳細の補足は、このドメニコ会の修道僧が生前ポーロ家と知り合いだったと見られる節があるだけに、それなりの根拠があるのかも知れない。いずれにしても、文章から受ける感じからして、マルコが物心つく以前と見られる。それ以前ニコロがどこにいたのか、ヴェネツィアの家族と共にあったのか、それとも外国おそらくコンスタンティノーブルで商売していたのか、は分からない。

が、おそらく同地にいたのであろう。兄の老マルコの遺言に、「かつてコンスタンティノーブル在」とわざわざ記されてあるところから、その滞在は一時的なものではなくかなり長期のものだったと考えられるからである。つまり彼らは、実質的にヴェネツィアの支配下にあったラテン帝国の首都コンスタンティノーブルを拠点として活動している商人であり、そこにポーロ家の商店があり、長兄の老マルコが常駐していたのであろう。一方ニコロはそことヴェネツィアあるいは各地を往来しており、1254年頃一時的に帰国して妻を身ごもらせ、その後どこか外国たぶんまたコンスタンティノーブルに向かったのであろう。妻子を故郷に残したまま何年も、時には10年以上も遠方に留まって商業に携わるのは、当時のヴェネツィア商人には珍しいことでは

なかった。

< c. 1260-69 ニコロ・マッテオ第1回東方行 >

そして「1260年」、ニコロとマッテオはそこを後にしてソルディアに渡る。しかしこの1260年というのも近代の校訂者による訂正である。Pの「1269年」は論外として、F・FG・Rらほとんどの稿本で「MCCL」（1250年）となっているが、それでは計算が合わないからである。アークレに帰り着いたのが1269年4月とみられることはすでに見た。コンスタンティノーブル出立後それまでに二人は、旅行記によると、ベルケの西方タルタリの国（キプチャク・カン国）に「1年」、ブハーラに「3年」滞在し、そこからグラン・カンの宮廷（どこかは不明）に着くのに「1年」、そこに滞在し（期間明記なし）、帰路に「3年」と、計8年以上かかっている。これからして、出発はMCCLX(1260年)の誤写ではないかと考えられた。また二人は、西方タルタリと東方タルタリの争いのために道を閉ざされて帰国できなくなるのだが、その争いが起こるのは1262年以後のことである。

1250年ならマルコの誕生以前となってしまうし、フラグの東方タルタリの国もまだなかった。マルコも詳しく記しているごとく、フラグがバグダードでアーッバース朝最後のカリフを倒し、通称イル・カン国を建てるのは1258年のことである。それに、二人はボカーラでフラグからフビライのもとに派遣されるさる「高官」と出会い、その求めに応じて東方の宮廷に赴くのだが、この人物は後の元朝の宰相として名高いバヤン（伯顔）と見られ、その派遣がちょうど1264-65年のことで合致する。

彼らのコンスタンティノーブルからの出発が確かに1260年であったか、それ以前か、それとも翌1261年のラテン帝国崩壊の時であったかは分からない。とにかくその頃であろう。もし1260年かその前だったのなら、すでに情勢は不穏となり、商売もうまくゆかなくなっていたのであろう。あるいは新たに有望な市場として登場してきた黒海とロシアに目を付けたのかも知れない。1261年なら、逃げ出すほかなかった。

もっともかの文章は、Fによるかぎり、要するにコンスタンティノーブルが「皇帝ボードゥアン [2世] の治世下にあった」時(1228, 1238-61)である

こと、「1250年」にニコロとマッフェオの二人が同地にあったこと、そこには商品を携えてヴェネツィアから来たこと、さらにそこからソルディアに向かったことを述べているだけで、それがコンスタンティノーブルに来た年なのか、それともソルディアに向かった年なのか、またそこに来てそのままソルディアに向かったのかははっきりしない。したがって1250年というのは、彼らが何度かヴェネツィアとコンスタンティノーブルの間を往き来したある年のことを指しているのかも知れない。1250年に来てそのままソルディアに向かったということは有り得ないし、1260年に初めて来たということも考えにくい。それでは、マルコの誕生を見ぬままヴェネツィアを後にしたとの記事と矛盾する。

写本Vには、ヴェネツィアの「ポDESTAとしてポンテ殿があったとき」とある。しかし、この文があるのは唯一同写本のみであり、またポンテPonteという姓はヴェネツィアに存在するが、歴代のポDESTAの中には見いだされない。コンスタンティノーブル最後のヴェネツィア・ポDESTAはマルコ・グラデニーゴで、彼は少なくとも1259年からその職にあった。当事者でもないマルコが当時のポDESTAの名を知っていたとは思えないし、後に父か叔父のノートを見て書き加えたことも考えられるが、後世の補筆が疑われる。事実、ラムージョはこの名を採用していない。

クリミア半島のソルディアはもともとギリシア人入植者の町であったが、1239年バトゥの遠征軍に征服されて、モンゴル人に貢納を納めていた。13世紀にはいると、ジェノヴァ人のカッファに対してヴェネツィア人の交易拠点となっていた。後の老マルコの遺言によると、そこに「兄弟商会」があり、それを「弟たちに遺贈する」とあるところからすると、それは兄弟3人のものだった。1260年頃コンスタンティノーブルからそこに向かったのはニコロとマッフェオだけだから、老マルコが先に移って店を構えていた可能性が高い。二人がさらにそこから東方への旅に出たのに対して、残った兄の老マルコは、1280年のその遺言がリアルトで認められていることからして、それまでのある時点、おそらく故国に残っていた三人の父（アンドレーア？）つまりマルコの祖父が亡くなったのを機会に、ヴェネツィアに引き揚げたのかも

知れない。

フランスのルイ9世からカラコルムのモンケ・カーンのもとに派遣されたフランチェスコ会士ルブルクは、7年前の1253年にコンスタンティノープル(5.5発)からソルディア(5.21着、6.1発)、そしてサライと彼らと全く同じ行程をとっているが、ソルディアでは、「私たちより前にコンスタンティノープルからある商人たちがきており、サルタクを訪問しようとする使節たちが聖地からここにやってくると言い触らしていました」と書いている。また、これからの長旅で所持品を運ぶのに「牛車と荷馬」のどちらがよいか相談したところ、彼らは牛車を勧めたとも述べている⁵。この「コンスタンティノープルからきた商人たち」の中にすでに老マルコがいたと想像するのは、楽しい空想であろう。いずれにしても、二人の旅がどのようなものであったかの参考になる。

一方、9年前後の東方行から1269年4月アークレに着いた二人は、そこで教皇が亡くなっているのを知る。ここで興味深いのは、FとFGでは「・・・という名の教皇」とその名が空白になっていることである。Fが最も古いテキストと考えられることからこれは、口述したマルコも筆録したルスティケッロもその名を知らなかった、あるいは忘れてしまっていたことを示す。子供の頃に、30年も経ってのことだから無理もない。さらには、もしマルコがニコロやマッフェオのメモをも利用したとすれば、それにも記されていなかったことにもなる。これに対して、他の稿本(TA・VA・P・R)では「クレメンス4世」と正しく補われており、それらがFより後次の版であることを示している。しかしそれが誰によって補われたのか、訳者か写字生かそれとも全く別の人物によるのか、またどの段階で行われたのかは分からない。あるいはマルコ自身によってジェノヴァからの解放後ヴェネツィアで、父のメモや叔父の話に基づいて補われたことも考えられる。

一方、それらでは父と叔父の帰着年次が1272年と訂正されていることは前にみたが、その根拠は詳らかでない。考えられる理由としては、次のグレゴリウス10世の選出が1271年9月1日だから、前教皇の死はそれからさほど遠からぬ頃、つまり同じ年とみなして、二人の到着を翌1272年4月としたことが

想像できる。もっともすぐ続けて、2年後再びアークレにやってきたとき新教皇が選出されたとあり、矛盾するが。

教皇がいないことを、本当にアークレに着くまで二人が知らなかったかどうかは疑わしい。ヴェネツィア商人の情報網はレヴァンテ地域にくまなく張り巡らされており、彼らも帰路のどこか、少なくとも東方交易の一大拠点であった小アルメニアのライアスでは、西方の情報を積極的に集めた、と考えた方が自然である。ましてや二人はフビライから特別の使命を託されていた。これはむしろ、マルコの旅をできるだけドラマティックなものに仕立て上げようとしたルスティケッロの物語的技巧に帰すべきことかも知れない。

その空位をおそらくライアスでは知ったであろうが、聖墓の上に燃えるランプの火とキリスト教の博士百人を連れ帰るとのフビライとの約束があったため、とりあえず二人はそこからコンスタンティノープルや直接ヴェネツィアには帰らず、シリアに残る西方キリスト教国の唯一の根拠地となっていたアークレに向かった。

そしてそこで、「教皇特使テバルド・ダ・ピアチェンツァ」と接触する。しかしこれは有り得ないと考えられている。テバルドはまだリジェの司教座聖堂助祭であり、当時フランス王ルイ9世の計画した十字軍勧説のためヨーロッパを巡回しており、1269年4月にはイギリス、同12月28日にはパリにいたことが確認されているからである。クリッチリーは、これはアークレに住んでいたエルサレム司教ギョーム・ド・アーヘン(1270.4没)のことで、それを後に世話になるテバルドに統一してしまったのであろう、と見ている⁶。とすると、この時期の記述も必ずしも信用できないかも知れない。この間違いといい、前に見たように教皇の名を知らなかったことといい、さらには、フビライから特別の使命を託され黄金のパイザももらいながら、できるだけ急いで然るべきところを帰路に3年もかけていること、つまり商売しながら帰ってきていることといい、マルコが語るその旅の宗教的・政治的使命というのは本当であったのかとの若干の疑念は禁じ得ない。これまたルスティケッロの、あるいはマルコとの共同の創作であったとすれば、ポーロたちの行動がどこにも記録に残っていないのは納得し易い。

しかし、途中で病に倒れてしまったが、帰路フビライがコガタルという家臣を同行させたこと、また二人がまずアークレに向かったこと、さらには新教皇の選出を待つて2年もヴェネツィアに留まっていることを考えるなら、その使命というのは本当であった蓋然姓の方が高い。もっとも、フビライがトルコ語かモンゴル語で認めて二人に託したという教皇宛書簡は残っていない。もし見つければ、今世紀始め(1920年)ヴァティカンの古文書庫から発見された、カルピニに託されたインノケンティウス4世宛クユク・カーンの書簡(1246年)⁷と同じような調子なのか、それともどう違うのか、興味深いものであろう。

そこで、二人はしかたなくヴェネツィアに戻ることに決める。アークレから帰り着いたのは、7-8月頃であろう。新教皇が選出されるのを待つてそこに「2年」留まる。彼らが待たされる羽目となった、クレメンス4世死亡の1268年11月29日からグレゴリウス10世選出の1271年9月1日までのこの2年9か月は、教会史上最も長い空位期として知られる。シチーリア王シャルルが介入したためである。この時期イタリアをめぐる国際情勢は激しく揺れ動くが、その中心となったのがこのフランス王ルイ9世の弟シャルル・ダンジューであった。

1250年(12.23)フェデリーコ2世の突然の死後、イタリアの神聖ローマ帝国はその庶子マンフレディによって回復され、彼は1258年(8.10)シチーリア王を宣言したが、シュワーベンと激しく対立する教皇たちはこれを認めず、彼を破門に処してきた。1261年に選ばれたフランス人教皇ウルバヌス4世(1261-65)は、フランスの力に頼るべく、ルイ9世に弟のアンジュー伯シャルルの派遣を要請した。次のやはりフランス人教皇クレメンス4世(1265-68)もシャルルに、シチーリアとナポリの王に推戴すること、教会の宗主権の承認と貢納の支払いを条件に征服した土地全てを封土として与えること、を約束した。それに応えて1266年(2.26)ベネヴェントでマンフレディを破ってシチーリアとプーリアの王となったシャルルは、1268年(8.23)にはタリアコッツォでフェデリーコ2世の孫コツラディンを捕らえ、ナポリのメルカート広場でその首をはねさせた(10.29)。こうしてホーエンシュタウフェン家という

障害を取り除いた冷酷な野心家シャルルは、征服した南イタリアとシチーリアに、ビザンティン領とエルサレム・シリアの十字軍領土を加えた一大地中海帝国の建設、つまり東ローマ帝国の再現を狙った。それはかつてのノルマン騎士たちの夢でもあり、二度にわたってヴェネツィアが砕いたものでもあった。

その実現のためシャルルは、同盟・婚姻・条約・買収等あらゆる手段を用いた。モレーア公国（ペロポネソス半島）は、ヴィルアルドゥアンの後32年間統治したギョームの娘イサベルを息子フィリップの妻に迎えてその相続権を確保し、これを勢力下に収めていた⁸。コッラディンの処刑により起こったエルサレム王の後継問題はキプロス王アンティオキアのユーク3世とマリーの間で争われ、前者に決着したが、シャルルは後にマリーからその継承権を金千リラと終身年金で買い取った。ラテン帝国については、娘ベアトリスを最後の皇帝ボードゥアン2世の子フィリップと結婚させ、その継承権を手に入れた。また南イタリアでも首府をパレルモからナポリに移し、イタリア人を排除してあらゆるところでフランス人を重用し始める。そして1268年11月29日クレメンス4世が没すると、早速教皇選挙に介入し、自分の影響力の及ぶ人物を据えるべく画策した。しかし、代々フランス人教皇が続きフランスの影響が余りにも大きくなることを憂えるイタリア派枢機卿たちは、危機感を抱いてこれに抵抗した。また、ヴィテルボで行われたこの選挙会議には第8回十字軍に加わった多くの貴顕が参加し、父シモン・ド・モンフォールを殺されたギー・ド・モンフォールが、同地の教会でイギリス王エドワードの弟ヘンリーを殺害するという、当時の大事件があつて混乱した。これを利用してシャルルは、自分に有利な人物が選ばれるまでその選挙を延期させた。

ヴェネツィアにあったその2年間、ニコロとマッフェオの二人が何をしてきたかは分からないが、彼らには二つの明確な行動目標があつたはずである。まず一つは、聖油と百人のキリスト教博士の派遣というフビライからの宿題である。教皇が空位のうえテバルドとはまだ知り合っていなかったのだから、故郷ヴェネツィアの宗教界に持ちかけるほかなかつたと思われるのだが、そ

うした接触の記録はない。かといって、フビライの書簡を教皇選挙の行われているヴェテルボに届けに行くこともしていない。もっとも、ヴェネツィアの教会は政治や外交には力をもたなかった。サン・マルコの首座も司教ではあったが、実際は国の役人だった。グラードには総大司教があったが、当時のアンジェロ・マルトラヴェルソは説教師教団の高僧ではあっても、高齢だった。

もう一つは、この希有なビジネス・チャンスを見逃さぬことだった。次の長旅に備えて準備を怠らず、道中売りさばくあるいはフビライに献上すべき宝石や金細工を主とする商品をしこたま仕入れたであろうことは想像に難くないが、そうした形跡も記録には残っていない。ヴェネツィアの商業界が、ソルディアに拠点をもつ商会の二人の仲間によって東方の大帝国の大君主との良好な関係に基づいて提供されたこの新たな可能性を全く無視したことは有り得ないだろうし、また二人も伝統的なコッレガンツァ（共同出資）の形で、遠方に投資すべき資金を調達しなかったというのも考え難い。その時、前述の書簡の他に、二人が直々に授かったという黄金のパイザが説得力を持ったことであろう。

1261年のラテン帝国崩壊でコンスタンティノープルを失ったヴェネツィアは、この前年の1268年にようやくミカエル・パレオロゴスと5年の休戦条約条約を結んでかつての商業特権を回復したばかりだった。そして、シリア地域がエジプトのマムルークの手に陥ちつつあったその頃、ヴェネツィアもジェノヴァも新たな市場を求めてアナトリア半島や黒海周辺に進出していた。事実二人が出発したのもクリミア半島のソルディアからだった。そして9年後、貴重な体験と情報を携えて帰ってきたに違いないにもかかわらず、二人が国の政府にそれを提供し、2回目の旅をさらに成果の上がるものとしようとした様子も、また政府の方からそれを活用しようとした形跡もない。文章からするかぎり少なくとも、共和国派遣とか、フビライ宛に何かを託すという形にはならなかったようだ。

一方家族については変化があった。後の1280年の叔父老マルコの遺言状によると、家は「サン・セヴェーロ」区にあり、ニコロの新たな妻「フィオル

ダリーザ・トレヴィザン」が同居している。とするとニコロは、1269年にヴェネツィアに戻ってきたときこの女性と再婚したことになる。事実そこから、マルコの腹違いの弟マッフェオが生まれている。しかしガッロは、このマッフェオが1295年と96年に大評議会議員に選出されていることを記した新たな記録が発見されたことから、オルランディーニの言うごとく1270-72年生まれとすれば23-5歳となって若すぎ、したがってニコロと二番目の妻フィオルダリーザの結婚は第1回東行以前でマルコ誕生の後、すなわち1254-60年と考える⁹。最初の妻がマルコを出産した後すぐ亡くなったとのピピーノの情報が正しければ、大いに有り得る。とするとまたニコロは、1254年にヴェネツィアを後にしたのちまた帰ってきており、市とコンスタンティノーブルの間を往き来していたことが想像される。

彼らがヴェネツィア滞在中の1270年8月27日には、クレモーナでジェノヴァとの和平が結ばれている。これも、コンスタンティノーブル再征服のため両市の海軍力を必要としたシャルルの介入によるものであった。帰国の前年1268年(7.7)にはドージェ・ラニエーリ・ゼン(1253-68)が亡くなり、ロレンツォ・ティエポロ(1268-75)に代わっている。1258年のアークレでの対ジェノヴァ戦の勝者で、民衆に人気のあったこの新ドージェの華やかな就任式の有り様は、ルスティケッロと同じくオイル語で書いた作家マルティン・ダ・カナルの『ヴェネツィア史』に詳しく描かれている¹⁰。少年マルコももちろんそれを観たことであろうが、誕生から出発までのマルコの記録は一つもない。

<c. 1271 第2回東行 ヴェネツィア発>

こうして2年たち、待ちきれなくなった彼らは、今度は17歳になった若者マルコを連れて三人で再びアークレに渡る。彼らに出発を決意させたのは何か分からないが、せっかくの儲けの機会を逃したくなかったというのが本音であろう。グラン・カーンからの宿題のうち、賢者百人の方は無理というものだったが、ランプの方は何とかなるはずだった。この2年を、通年で数えると1270年のいつかの時点、満で数えると1271年の夏頃ヴェネツィアを発ったことになる。

13世紀中頃ヴェネツィア国営の定期便ムーダ (muda:ガレー船に護衛された商船隊)には、ロマーニア (Romania:ギリシア・コンスタンティノーブル)行きとオルトレマーレ (Oltremare:キプロス・小アルメニア・シリア・パレスティナなど)行きの二つの航路があり、春と秋の2便出ている。春の便は3月か4月復活祭の頃に発って秋に帰る、秋の便は8月末か9月始めに発って向こうで冬を越し翌年の復活祭か5月頃までに帰る、というものであった。商業用の帆船を同行することと積載量が小さくガレー船の漕ぎ手の食料補給を要することから、頻繁に寄港する必要があった。少なくとも、アドリア海東岸のザーラ、ドゥラツォ、コルフ、ペロポネソス半島のモードネとコロネ、クレータのカンディア、キプロスのリマツソルには必ず寄港した。アドリア海の出口までは3、40隻が固まり、イオニア海に入ると、行き先によって各方面のグループに分かれた。片道2カ月くらいだったが、冬でも航海できるようになるのは同世紀の終わり頃からだったし、独自の自由航海には大きな危険が伴った。

とすると彼らはこのシリア行きのムーダを使ったと考えられ、1271年の秋の便に乗ったのでは着くのが10月頃となって遅すぎるから、1270年の秋の便か翌1271年の春の便のどちらかになる。1270年秋の便に乗ったとすれば、翌年秋にアークレを発つまで到着後1年もあって間が開きすぎるし、何よりもテバルドがまだ同地に来ていない。とすると、1271年春の便ということになる。順調に行けば6-7月頃着いたことになり、同書に記されているような用事を済ますのにちょうどよい。本文から受ける感じも、新教皇の選出を待ってぎりぎりまでヴェネツィアに留まっていたとの印象が強い。1271年にヴェネツィアを発ったとすると唯一、1295年に帰ってくるまで25年であり、「26年」とならない難点があるが、この26年をそれほど厳密な数字と考える必要はないであろう。ちなみに、Fとともに最もオリジナルに近いテキストと見なされるコットン断片では、「27年」となっている。¹¹

アークレは、ハイファ湾の北端にある南に面した小さな半島である。陸側には堅固な二重の城壁と連なる塔があって、町を攻撃から守っていた。コンスタンティノーブルの小型版である。市内はここでも各国・都市や騎士団の

区に分かれ、ヴェネツィア人区は約1万2千平米、1ヘクタール余りあり、東の入り江に面したもっとも条件の好い位置を占めていた¹²。ジェノヴァ人は1258年の衝突で追い出され、隣のティレに移っていた。

しかし、このシリアのラテン国家も、1250年にエジプトを奪ったマムルークの前に末期を迎えていた。二人が帰ってくる前年の1268年(5.18)にはそのスルタン、マルコの本にも登場するバイバルスによってアンティオキアが征服されている。要塞堅固なアークレは最後まで残ることになるが、それでも1263、66、67年と攻撃を受け、二人がヴェネツィアに発った後の1269年12月にも彼らは城壁の下まで攻めてきていた。ポーロたちがヴェネツィアを出た頃1271年3月には、シリア最大の城塞クラク・デ・シュヴァリエが陥落している。

この頃レヴァンテを騒がせていたのは、これまたマルコの本がその最初期の詳しい紹介となったアッサシン（暗殺者教団）の活動であり、1270年8月17日にはティレ領主フィリップ・ド・モンフォールと子のジャンが襲われ、父の方が殺されている。ポーロたちとも因縁浅からぬとみられるイギリス皇子エドワードも、後に彼らに襲われることになる。

そのエドワードのアークレ到着は、記録によれば1271年5月9日である。前年8月25日のテュニスにおけるルイ9世の死で中止となった最後の十字軍の後、シチーリアのシャルルの宮廷に滞在していたもので、テバルドもおそらくこれに同行して来たのではないかとみられている¹³。エドワードはバイバルスに対してペルシャのモンゴル人との提携を考え、数年前(1265年)フラグを継いでいたアバガに3人の使節を派遣し、協力の約束を取り付けた。¹⁴

ポーロの三人がアークレに着くのは6-7月頃だから、エドワード（とおそらくテバルド）たちより少し後ということになる。彼らとそのエドワードと知り合ったかどうかは分からないが、狭いアークレの町でのイギリス皇子の滞在を彼らが知らないわけはなかったであろう。一方、テバルドのもとにはすぐに出向いてフビライからの手紙を渡し、その要請を伝えた。手紙はずっと前にペルシャ語に、そしてラテン語に訳されていたに違いない。

リェージュの助祭だったテバルド・ヴィスコンティ・ダ・ピアチェンツァ

はさる福者の孫で、すでに子どもの時当地ピアチェンツァのサン・アントーニオ教会の参事会員であったが、パレストリーナの枢機卿で同郷のイアコポ・ペコラーリの家族の中で育った。リェージュの職にはわずか25歳の時に任命された。当時の歴史に残るものとしては、1241年フェデリーコ2世の庶子でサルデーニャ王だったエンツォによりピーサ沖ジーリオ島近くで捕らえられた聖職者たちの解放のために奔走している。この事件で憤死したグレゴリウス9世(1227-41)を継いだインノケンティウス4世(ジェノヴァ人シニバルド・フィェスキ 1243-54)に仕え、この教皇がフェデリーコ2世に対抗して召集したリヨン公会議(1244-45)を組織する仕事を託された。

フェデリーコ2世の廃位という強硬策を宣言してその後の神聖ローマ帝国衰退のきっかけを作った同会議の後、テバルドはパリに戻り、トマス・アクィナスとボナヴェントゥーラという当代最高の師の下で神学の勉強に励んだ。と同時にルイ9世の好意を得た。エドワードとは、シモン・ド・モンフォールを頭とする諸侯による彼の父ヘンリー3世に対する反乱の鎮圧に、ジェノヴァ人オットボーノ・フィェスキ枢機卿(後のハドリアヌス5世 1276)の外交使節団に加わって英国に渡ったとき知り合ったものとみられる。シモンとその一党を破門するためにウェストミンスターに召集された公会議、エドワードの人質と逃亡、そしてモンフォールの敗北と処刑となって終わった同事件では、テバルドは両者の間において精力的に仲裁したといわれる。1270年にエドワードはルイ9世が計画した十字軍に加わるが、その後もテバルドがずっと彼と行動を共にしていたのかは分からない。

こうしてポーロたちは今度は、教皇特使としてアークレに赴任してきていたテバルドの下に駆けつけた。彼らはいろいろと相談したに違いない。フビライの手紙のこと、賢者百人のこと、聖油のこと。そしてとりあえず聖油だけということになり、テバルドの紹介状を書いてもらって聖地に出向いたのは、おそらく同書に書いてあるとおりのことであろう。そしてアークレに戻り、グラン・カン宛釈明の手紙を書いてもらい、海路ライアスに向かった。ダマスクスからバグダードへのルートはマムルークの手にあって通れなかった。9月1日の教皇選出直前だから、8月末のこととなる。

ライアスを擁するキリキアの小アルメニアも、この頃困難な時期を迎えていた。東方の新勢力モンゴルがトルコを破ったのをみて、ヘトゥム2世(1226-69)はカラコルムのモンケ・カーンの宮廷にまで出向いて(1253-55)自国の領土を安堵してもらっていたが、そのモンゴルの勢いも1260年アインジャールルートでの敗北で止められ、以後はマムルークの攻勢を受けることになる。1266年にはその武将カラウーンによって侵略され、68年には姻戚関係にあったアンティオキアが陥落し、ヘトゥムは退位して子のレオン3世(1269-89)に代わっていた。アジアにある唯一のキリスト教国として、その港ライアスはシリアに代わってヨーロッパ諸国の東方貿易の拠点となっていた。この年1271年に更新された同国との条約で、ヴェネツィアは初めてバイロ(bailo 領事)を置くことを認められている。

9月1日、そのテバルドが教皇に選出される。イタリア人だがフランス派に近い人物として、妥協が成立した結果である。ボナヴェントゥーラの推薦があったとも言われる。シャルルのお眼鏡にもかなったことを意味する¹⁵。この通知を受け取ったテバルドは、すぐレオン3世に連絡を取って三人を呼び戻したようである。自分が教皇となつたとすれば、事情はすっかり違ってくる。何よりも考えたのは東方布教のこと、ひょっとして東方の大帝国をキリスト教化させる可能性であろう。改宗さすのに成功すれば、その栄誉と名声は歴史に残る。このチャンス逃す手はない。あまつさえ、向こうから接触を求めてきているのである。それはまさに、自分が仕えたインノケンティウス4世の夢でもあった。フランチェスコ会士カルピニをカラコルムのクユク・カーンのもとに派遣した(1245-47)のはその教皇であり、テバルドが尽力したリヨン公会議の時であった。その名高い報告記も、カルピニが持ち帰ったクユクの手紙もきつと目にしていたことであろう。もつとも爾来25年、その間に東方情報は飛躍的に増えていたはずである。無限の富を有するという司祭王プレスビテル・ヨーハンネースの姿はおぼろげになりつつあったし、現にシリアとビザンティンを取り巻く、東のペルシャと北のロシアを支配するのはモンゴル人であった。彼らがどのような民族であるかは、もはや幻想を抱かせぬほどであったろう。

新教皇グレゴリウス10世がより現実的に期待したのは、むしろイスラム教徒に対しての彼らとの提携であり、まだ同地にあったエドワードとも相談したかも知れない。アバガはエドワードにマムルーク攻撃を約束していたし、それは間近いはずだった。それにグラン・カンが加われば、少なくともエルサレムとシリアは取り戻せるかも知れない。小アルメニアのレオン3世も同じ思いであったのだろう、ガレー船一隻と使者まで付けて三人を送り戻した。このことは、三人が同国の宮廷と連絡を取っていたことを示す。もっとも、三人を送り帰したという記録が残っているとは、アルメニア側からの報告はない。

戻ってきた三人にグレゴリウス10世は、フビライ宛に新たな手紙を書いた。これまた残っていれば、先代のインノケンティウス4世のクユク宛書簡との異なりが興味深いであろう。残念なことにこの書簡も、確かに多くの贈り物と共にフビライに手渡されたと述べられているにもかかわらず、今は中国にもどこにも残っていない。

もう一つの要請だった百人の賢者の代わりに、教皇は、ニッコロ・ダ・ヴィチェンツァとグリェルモ・ダ・トリポリという二人のドメニコ会士を同行させた。乗ってきた船で急いでとって返したであろうから、9月中のこととなる。

その年10月、エドワードとの約束を守ってアバガは、アナトリアにいた1万騎をシリアに向け、アレppo攻撃を命じた。一方ダマスクスにいたバイバルスはエジプトから援軍を呼び寄せ、11月12日進軍を開始した。数において劣るモンゴル軍は、決戦を避けて退却した。キプチャク・カン国やカイドゥとの争いのことも考えねばならなかった。エドワードもブリテン騎士を率いてアークレの城外に撃って出たが、シャロン平地で矛を交えただけで、持続的な成果は挙げられなかった。

これを恐れてかの二人の修道士は Templar 騎士団と共に帰国してしまったという。これはしかし、そのままはいささか信じ難い。選ばれたばかりとはいえ、教皇の命令で、しかもそれには絶対服従すべき修道会士の身である。グリェルモ・ダ・トリポリは高名なイスラム学者だったという。先達のカル

ピニの報告は知っていたに違いない。彼にとっても、新たな知識と情報を仕入れ、布教の栄誉を手にする絶好の機会だったはずである。にもかかわらず、まるで逃げ帰ってしまった。どうしてか。フランチェスコ会士とドメニコ会士の差に帰すべきであろうか。それとも、原因はむしろポーロの側にあったのであろうか。旅行記では、それから3年半かかってフビライの宮廷にしている。つまり、商売しながらの旅であったことを示す。最初からそのつもりであれば、気の進まぬ修道士たちと話し合って妥協が成立したということも考えられよう。いずれにしてもかの二人の修道士は、マルコに代わって歴史に名を残す機会を捨ててしまった。

その後もアークレに留まっていたエドワードは、1272年6月16日暗殺者教団の刺客に襲われ相手を斬り殺したが、自分も重傷を負い数カ月病床にあった後、十字軍を放棄して本国に帰って行った。後にジェノヴァの獄で出会ってマルコの手記を執筆することになるピーサの騎士物語作家ルスティケッロは、このエドワードと知り合いで、自分の円卓物語の種本を彼から借りたと述べている。とすると、この時ルスティケッロもアークレにいた可能性もでてくる。しかし、彼が王の知己を得たのはいつかは明確でないし、それが本当かどうか疑わしい。これに限らず、ルスティケッロについての記録も、その作品以外いっさいない。¹⁶

一方、1272年4月6日ローマで就位してグレゴリウス10世を名乗ったテバルドは、1274年5月やはりリヨンで公会議を開催している。ポーロの3人がちょうどフビライの宮廷に着いた頃である。その会議には、おそらくアバガから派遣されたと思われるタルタル人の出席があり、洗礼を受けて帰って行ったという。少なくとも彼らを目にした時テバルドは、自分が派遣したかの三人のことを思い起こしたことであろう。この公会議にはまた、ギリシア正教会からの参加があり、ローマ教会への統合を約束したことが記録されている。しかしこれは、コンスタンティノーブル再征服を狙ってギリシアへの攻勢を強めるシャルル・ダンジューに対して、東西両教会の統合をちらつかせて教皇を牽制し、シャルルの企図をくじこうとした皇帝ミカエル8世の策略だったと言われる。事実、その後も教会合同はついに実現しないままに終わる。

グレゴリウス十世は1276年1月10日アレッツォで在位4年4カ月11日で死亡する（生年不詳）。

以上はしかし、少なくともポーロに関する部分は全て推定である。これらの出来事に関する記録のどれにも、彼らの名は見えない。少なくともアークレにおけるものは教会の文書には記録されていたことだろうが、20年後の1291年の陥落と共に失われたのであろうか。もしこれらが全てルスティケッロあるいはマルコ自身による捏造なら、よほどよく出来た創作ではあるまいか。

<1280 老マルコ遺言状>

彼らの記録の最初のもものは、1280年の叔父老マルコの遺言状まで待たねばならない¹⁷。「8月終わり5日」とあるから、8月27日のものである。「かつてコンスタンティノーブルにあったが、今はサン・セヴェーロ区に住む」ことはすでに見た。「重い病を得た」がためとあるが、1305年の大評議会の記録に現れるから、回復してさらに25年以上生き延びたことになる。筆記者は同区の司祭「マルコ・ディ・ボンヴィチーノ」、遺言執行人としては、「サン・アントニーノ区のジョルダーノ・トレヴィザンと我が義妹フィオルダリーザ・トレヴィザン」、つまりニコロの妻が指名されている。ジョルダーノは、次の若マッテオの遺言状によるとフィオルダリーザの兄弟である。ただし、「我が兄弟のニコロとマッテオがヴェネツィアに帰ってくるまでであって、その時には彼らだけが我が執行人である」との但し書きがある。そして、まず十分の一税を払い、衣類や所持品を売却して埋葬の費用に充てること、余れば自分の魂を弔うためミサをあげてくれるよう頼んだ後、「かつてサン・フェリーチェ区現イウステイノポリス〔カーポ・ディ・イストリア〕に住むドナート・グラッソ」なる者と共同で商会を所有しており、自分の出資分は700リブラであることを証言する。興味深いことに、その商会は「イェーデル Jader」つまりザーラ Zaraにある。その商会のために他に50リブラを費したこと¹⁸、同じサン・セヴェーロ区のアンジェロ・ダ・トンバに借りている52リブラをその中から返してほしいことを述べる。これからすると老マルコは、家族に任せているソルディアの商会の他に、アドリア海東岸のザ

ーラにも店を持っていたようだ。しかし、規模は余り大きくなさそうである。ザーラは、ヴェネツィアに対する反乱止むことなき市でもあった。

しかる後残った金は全て、「ソルディアにいる我が息子ニコロ」に遺贈する。もし彼が死亡している場合は、「我が愛しき兄弟ニコロとマッテオ」のものである。彼らももし死亡している場合は、その息子たちつまり「甥のマルコとマッテオ」に遺贈する。これからすると、彼がヴェネツィアに引き揚げた後、息子の若ニコロがソルディアに残ってポーロ商会を切り盛りしていたことになる。若ニコロにはまだ息子（マルコリーノ他）は生まれていないようである。

しかしその会社はあくまで三人の「兄弟商会」であって、息子の若ニコロのものではなかった。したがって「その私の分の中から」、「200リブラを娘マロカ」に、「100リブラを庶子アントーニオ」に遺贈する。娘マロカはその後も同地に住んでいることが見えるが、庶子アントーニオの名は後の他の記録には現れないことからすると間も亡くなくなったのか。「小箱〔金庫？〕に持っている金貨2イペルペラと3フロリン」は、「義妹のフィオルダリーザ」に。「男女の奴隷たちを皆解放する」とあるが、その人数と人種の明記はない。次いで、「ソルディアに持っている私の館は同地の小兄弟修道士〔フランチェスコ会士〕」に遺贈する、ただし「前述我が息子と娘マロカの住まいは、彼らの生きてある限り」除く。これからすると、ソルディアの三人の兄弟商会というのはかなり大きなものだったようだ。また、老マルコはニコロら三人の帰国を少しも疑っていないことが注目される。絹織物や銀器など値打ちのある品物、そして「その他の財産は我が息子ニコロに遺贈する」となって終わる。

これがマルコの名が記録に現れる最初である。1280年といえ、1274年に中国・大都に到着したとすると、グラン・カーンに仕えて6年目である。フビライの宮廷では、ちょうどポーロたちがやってきた頃失敗に終わっていた日本遠征（文永の役 1274）の雪辱を果たすべく、2回目のための準備が進められていた。フビライの役人であったとのマルコの陳述がもし本当なら、彼はその様を目の辺りにしていたことであろう。翌1281年に行われたそのジパ

ング遠征（弘安の役）の記事は、後に彼の書をして歴史を動かすものとなる。

一方ヴェネツィアでは、前述ロレンツォ・ティエポロを継いだドージェ・イアコポ・コンタリーニ(1275-80)が退位し(3.5)、ジョヴァンニ・ダンドロ(1280.3.31-89)に代わった年である。この時にも、10年前にシャルル・ダンジューの要請で結ばれたジェノヴァとの休戦条約は更新されたが、現実には争いは数と激しさを増していた。それが頂点に達するのが、ちょうどポーロが西方に帰ってくる1294年のライアス、1296年のペラ・カッフア・フォチェーア、そして1298年のクルツォラなどであり、マルコもそうしたどれかに巻き込まれたのであろう。その前1282年にはそのシャルルが晩鐘の乱でシチーリアから追い出されてついに退場し(1285没)、1284年には後にマルコと出会ってその旅行記を執筆することになるピーサのルスティケッロが、メローリアの海戦でジェノヴァの捕虜となっていた。

2 帰国時から死まで (1294-1324)

<1295 ヴェネツィア帰着>

爾来25年、ヴェネツィアに帰り着いたのが「1295年」である。これは全ての写本で一致するし、執筆の数年前のことだから確かであろう。中国「ザイトゥン」（泉州）からの出帆が1290年末か1291年初であることは、旅行記に書かれてあるのとほぼ一致するペルシャ使節一行の記事が『永楽大典』に記載されていることが、中国の学者によって発見されて確定した¹⁹。また同様な記事が、ペルシャ側史書ラシード・アッディーン『モンゴル史』や『ワッサーフ史』にも確認された²⁰。ところが、それらには「三人の使者ウラタイ、アピシュカ、ホージャ」や「コカチン姫」の名はあったが、ポーロ三人の名はなかった。これが、彼らの旅を疑う最大の根拠となっているのだが、もちろん反論の説明もいくつか提出されている。そのうち最も説得力があるのは、彼らは、同書の中で記されているようなあたかも正式の使節かコカチン姫の庇護者であるかのごとき役回りと違って、そうした国家的史書に記載されるほどの人物ではなかった、というものである。帰国のいきさつについてはあるいは彼の語るようなことがあったにしても、一行の中での位置づけは、職

を辞したかつての下っ端役人の色目人か、使節に便乗して帰国する一介の西方商人だったのであろう。そうした三人の名が正史に見えずとも不思議はない。

とまれ、ザイトゥンを出航した彼らは、「26カ月」かかってホルムズに着くから、ペルシャ着は1293年前半のことである。往路ペルシャを横断したのは1272-3年頃だから、20年ぶりということになる。その間に、フラグの建てたイル・カン国も早や傾きつつあった。

一つにはイスラム化であり、もう一つはモンゴル国家につきものの跡目争いである。ポーロたちがアークレを発った頃エドワードと連携してマムルークに当たったアバガ(1265-82)の後、弟のテクデル(1282-84)をはさんで子のアルグン(1284-91)が継いだ。彼は2年前に亡くなっており、その後継位をめぐる争いで弟のガイハトゥ(1291-95)と息子のガザンが争っていた。そこへ来合わせたポーロたちは、そのためアルグンの妃として連れてきたコカチン姫を、「アルブル・ソル」の地(ホラーサーン地方)にいた息子のガザンの下に送り届けた、という。これまた、送り届けたのが実際に彼らであったかどうかは分からない。

とにかくその役目を終え、タブリーズのガイハトゥの宮廷に「9カ月」留まったとある。何ゆえ9カ月も留まる必要があったのか不明であるが、おそらくその機会を商売に利用したのであろう。またその間に同宮廷の人物とも知り合い、いくらかの資料も集めたことであろう。ペルシャ語は長の途方滞在中に覚え、会話には不自由しなくなっていたであろう。商売する傍ら、20数年ぶりになる西方の情報、とりわけどのルートを取ってどこに向かうべきかを検討したことも確実である。いよいよそこを発って黒海沿岸トレビゾンダに向かうのは、すると1294年のこととなる。

出発時のアークレやライアスでないことが注目される。事実、この間にシリア情勢は大きく変わっていた。1287年ラタキア(ラディオケア)、89年トリポリがカラウンによって占領され、1291年(5.18)最後の拠点アークレが、続いてティル、シドン、ハイファ、トルトーサがその子アッアシュラフによって落とされて、シリアのラテン国家は消滅していた。その地続きにあるア

ジアの唯一のキリスト教国小アルメニアも彼らに包囲されていたし、イスラム化しつつあるイル・カン国からの支援を当てにすることはもうできなかった。それに、この国もまた跡目争いに揺れ、出発時ポーロたちが世話になったレオン3世(1269-89)の没後、7人の息子たちの間で混乱していた。彼らの伯父ハイトン(歴史家ヘトゥム)によれば、長子ヘトゥム2世の態度がはつきりせず、弟のテオドロスに位を譲ったりまた取り戻したりしていた。²¹

それに多くの年代記やヤコボ・ダックイの記事からも知られるごとく、ほんの少し前同1294年の春にはライアス沖でヴェネツィアとジェノヴァの衝突があり、ニコリーノ・スピーノラ指揮のジェノヴァの18隻のガレー船がヴェネツィアの25隻と商品を押収していた。タブリーズにもこのニュースは届いていたことであろう。となると、残るは北の黒海ということになる。

シリアから閉め出され、小アルメニアの足掛かりも失いつつあったヴェネツィアとジェノヴァはともに、新たな市場と交易ルートを求めて黒海周辺に進出した。彼らの根拠地はアゾフ海側のソルディアとカッフアであったが、南岸のトレビゾンダには、1204年の十字軍によって追い出されたコムネノス家の末裔がギリシア人小国家を建てていた。戦争状態にあるわけではなかったけれども、もちろんラテン人に対して友好的なわけでもなかった。この時の君主はヨーハンネス2世(1280-97)で、ジェノヴァの勢力下にあった。ヴェネツィアが協定を結ぶのは1319年のことである。²²

このトレビゾンダで三人は、そのコムネノス政権から総額4千イペルペロに上る財産没収の被害を受けたことが、1310年の叔父マッテオの遺言から知られる。しかし、それがどのような状況の下で起こったか、不当に奪われたのかそれとも商品を押収されたのか、説明はない。しかし彼らは泣き寝入りすることはなかった。それを訴え、帰国後ヴェネツィア政府にその補償を求めているからである。同遺言には、「トレビゾンダのコムネノス帝が同地域において我々の所有物に対して与えた損害の一部に対する補償として、1千リブラをヴェネツィアの主ドージェと市コムーネから受け取った」ことを明らかにしている。さらに続けて、その1千リブラのうち「自分の取り分である333と3分の1を甥のマルコに支払った」ことを述べている。

2年後の1296年、カプファに遠征したヴェネツィアのガレー船隊長ジョヴァンニ・ソランツォは、クリミアのトレビゾンダ人から4千イペルペロに相当する財産を没収しており、1301年ヴェネツィア大評議会はそれをトレビゾンダで被害にあった者に分配することを決定している²³。しかしマッフェオが、「今後返還されるべき3分の1は私のものである」と主張しているところを見ると、残り3千イペルペロは戻らないままだった。

この頃には黒海便のムーダがすでにあつた。ヴェネツィアからコンスタンティノーブルを経てソルディアに向かい、帰路はトレビゾンダを回ってコンスタンティノーブルに帰るといふものだった。おそらく三人はこれを利用したであろう。ソルディアには老マルコの娘マロカが夫とともにまだそこに住んでいたが、立ち寄ったかどうかは分からない。

コンスタンティノーブルは、往路は寄っていないからマルコにとっては初めての「世界最大の都」である。が、東方の大都カン・バリクを知った者にとっては驚嘆の的とはなり得なかったかもしれない。父と叔父にとっては25年ぶりとなる。後のマッフェオの遺言によると、1310年には親族のマニビリアが住んでいるから、そこに滞在した可能性もある。かつての彼らの家や店もまだあつたかも知れない²⁴。この当時の皇帝は、ラテン帝国を崩壊させたミカエル8世(1259-82)の子のアンドロニコス2世(1282-1328)である。ヴェネツィアとの関係は修復されていたけれども、彼もはっきりとジェノヴァ人を味方としていた。この皇帝との関係が悪化して翌1296年からはヴェネツィアは再びビザンティンと戦争状態に入るが、ポーロたちは今度は巻き込まれることはなかった。

コンスタンティノーブルからは、ムーダの春の便に乗ったのであれば2カ月かかって1295年の夏に、夏の便に乗ったのであれば秋に、ヴェネツィアに帰り着いたことになる。この頃にはムーダは越冬しなくなっていた。着いたのは、サン・マルコ広場カリアルト橋の船着き場。当時の税関はリアルトにあつた。彼らの帰国が話題になったかどうかは分からないが、帰国の記録はどこにもない。1280年から1320年にかけては、ヴェネツィアの同時代の年代記のないことが惜しまれる。家族には何らかの形で伝わっていたであろうか

ら、ラムージョがかの名高い「序文」で書いたような、「トロイアからイタカに帰ってきたユリシーズ」的光景は有り得なかったろうと考えられている。25年ぶりのヴェネツィアの町には大きな変化はなかったであろうが、おそらくそこに出迎えたポーロの家族たちの構成は大きく変わっていたことは後に見る。

その年1295(11.19)-96年と翌96(11.11)-97(10.10)年には「ニコロ・ポーロの子マテオ」が、かのジョヴァンニ・ソランツォの推薦で大評議会議員に選出されている²⁵。これから腹違いの弟マッテオが、留守中伯父老マルコと母フィオルダリーザの教育と指導よろしきを得て商人として成長し、力と富を蓄え、着実に地歩を築いていたことが窺われる。ここで興味深いことに、彼が95年にはサンタ・クロッチェ地区から選ばれているのに対して、96年は後にカ・ポーロとして有名になる彼らの家のあるカンナレージョ地区からであることから、三人が帰国後すぐ、持ち帰った財宝で今もその一部が残る広大な館を買い、一族を呼び寄せたことが推定される。その購入には、ヴェネツィアに残っていた老マルコも加わっているから、彼がまだ生存していることが分かる。

< 1298 旅行記編纂 >

次の年次は、旅行記が書かれた年「1298年」である。「ジェノヴァの獄で」となっているから、その間にマルコはジェノヴァに捕らえられたことになる。事実、両市の争いはさらに激しさを増し、第2次ジェノヴァ戦争の時期(1293-98)を迎え、各地で毎日のごとく大小の衝突を繰り返していた。マルコはそれらのどれかで捕らえられた。

16世紀のラムージョは1298年9月8日の名高いクルツォラ海戦を考え、マルコはそれにガレー船の船長として参戦していたとしたが、これは疑問視される。その戦争の記録にヴェネツィアでもジェノヴァでもマルコの名が出てこないことと、著作までの時間が余りにも短くなるからである。ジェノヴァに着くのが10月頃とすれば、1298年末までで3カ月、当時の暦の新年1299年3月まででも半年足らずしかない。その間にルスティケッロと知り合い、原稿を準備し、筆録させて、あの結構大部な本を完成するのはいくらなんでも無理

であろうと思われるからである。しっかりとした草稿があり、それがルスティケッロによってフランス語に移し替えられただけであれば必ずしも不可能ではない、と考える研究者もいるが。

14世紀のヤコポ・ダクィは、前述1294年6月2日のライアス沖海戦とした。が、これは帰国以前だから有り得ない。しかしその中で、「ボニファキウス6世[8世の誤り]の御世、商船隊同士の衝突で」とあるところから、ガッロは、その1294年のライアス沖での敗戦に仕返しするため1296年ジョヴァンニ・ソランツォが指揮したペラ、フォチェア、カッフア遠征の時の可能性が高いとした。今度は勝利したが、ヴェネツィア側にもかなりの被害があった。フォチェアは明礬の、カッフアは奴隷の輸出拠点だった。一方ムールは、当時レヴァンテ海域のいたるところで争っていた両市の、今は記録の残っていない衝突で捕虜となったもので、帰国翌年の1296年が最も妥当と考えた。

原因と経過についても、祖国防衛のためとかトレヴィザンで没収された財産を取り戻しに行く途中とか様々な説があるが、もちろん推測の域を出ない。これはボルランディの言うごとく、貴重な経験と知識を生かして再び東方交易に出かけた途中、というのが最も有り得るのではなかろうか。とすると、今回はムーダを使わなかったことになるが、その危険が現実のものとなったのかも知れない。

そしてかの書は、「1298年」にジェノヴァの獄でルスティケッロ・ダ・ピーサの手によって成った。これはほぼ全ての稿本で一致する。ただ1298年といっても、ピーサ暦だと1297年3月25日から1298年3月24日まで、ヴェネツィア暦だと逆に1298年3月25日から1299年3月24日まででとなるから、最大2年の幅がある。そのいつかは分からない。その原本も、その後の行方は知らない。誰が持ち帰ったか、マルコかルスティケッロか、それともジェノヴァ当局に召し上げられたのか。また、その場ですぐいくつかのコピーが作成されたのか、それとも解放後に誰かの手にあったオリジナルから写本が作られたのか、テキストの歴史と内容に関わる大きな問題となる。

両市の和平は1299年5月25日で、捕虜の解放が取り決められている。とすると、その年の夏か遅くとも秋にはヴェネツィアに戻ってきた。投獄中や解

放時の記録も、ジェノヴァにもヴェネツィアにも一切ない。同じ年に解放されたと考えられるかのピーサの作家ルスティケッロについても、その後の情報は一切ない。

こうして故郷に帰ってきてから後、マルコの方から外に活躍の場を求めようとした形跡はなく、隠棲した感がある。また、その貴重な体験や知識にもかかわらず、公職についた形跡も一切ない。ラムージオの記すごとく、ジェノヴァとの戦いで負傷したためか、それとも財産を失ったためか。一方、私人としてのマルコ自身や親族の者の記録、とりわけ裁判記録は多い。また、書物の中で彼に言及したものが出始め、その旅行記で一躍名の知られたことをよく物語っている。

その前、マルコの投獄中の1297年には「セッラータ」があった。ヴェネツィア共和国の最高議決機関である「大評議会」をより多くの者に解放する代わりに、その議員として選ばれる資格を、過去4年間に議員となったことがある者だけに限ろうというものであった。その資格が四十人委員会で承認されると終身議員となり、さらに子孫に世襲されることとなった。この時586名が承認され、翌年には追加承認があつて900名になったという。

弟の若マッテオがその議員になっていたことはすでに見た。また、後でみるが、1305年の老マルコの記録、及び1311年のマルコ自身の記録には「貴族」の称号が付けてあり、彼らはその階級に属していたことは確実に考えられるが、不思議なことに、マルコが大評議会の議員になったという記録も、その他の公職に就いたという記録も一切ない。父ニコロや伯父老マルコも同様である。あるいは「セッラータ」が行われたのが投獄中であつたことが関係しているのであろうか。しかし、その後も追加承認が行われている。それともラムージオの言うごとく、ジェノヴァとの戦闘でかなりの傷を負い、公務には耐え得なくなっていたのか。ガッロは、おそらくポーロたちも審査の対象になったのであろうが、彼らが余りにも長く東方にあつてヴェネツィアを留守にしていたため、大評議会の職務を遂行できるかどうか危ぶまれ、ずっとヴェネツィアに残っていた弟の若マッテオの方が選ばれたのではないかと推測している。²⁶

またラムージョによれば、解放後すぐつまり1299年か1300年に父の奨めで結婚したことになるが、事実かどうか分からない。1324年の遺言状で三人の娘が全て遺言執行人に指名されていること、上二人はすでに結婚していることを考えると、帰国後すぐつまり1295年か96年に結婚した可能性の方が高いのではあるまいか。妻の名は後の記録から、ドナータ・バドエルであることが分かる。

<1300 弟マッテオ遺言状>

次の記録は、異母弟マッテオがクレータ島に出かけるに当たって、その「小さからざる危険」をおもんばかって予め作成した1300年8月31日の遺言状である。²⁷

まず、「サン・ジョヴァンニ・クリソストモ区の故ニコロ・ポーロの子」とあることから、父ニコロの死は1295-1300年となるが、ラムージョの言うごとくマルコの解放後だったかどうかは分からない。ニコロの遺言状は残っていない。その後すぐ、自分が遺言せぬままにみまかるとのなきよう「自らの手で」認めて作成したこと、それを「封印」し、もしそうした事態になった場合には、それを忠実に「俗語からラテン語に」書き移してくれるよう、「サン・フェリーチェ教会の司祭にして公証人ピエトロ・パガーノ」に請うたこと、を記している。この俗語とはヴェネト語と推定され、この例からも、マルコら三人の旅行中のメモが、フランス語やラテン語ではなく母国のヴェネツィア方言で認められていたことが想像される。その原文の方は残っていない。

遺言執行人は、「[叔]父マテオ・ポーロ、兄弟マルコ・ポーロ、義父ニコロ・サグレド、親族[従兄弟]フェリーチェ・パオリーノ」²⁸。この最後の人物は、オルランディーニによれば伯父老マルコの息子ニコロの長子、ムールによれば母フィオルダリーザ方の親族である。

まず、グラードからカプッド・アッゲリスにいたる各修道院に「20ソルド」とリヴォアルトの全信心会に「150リブラ」を、「父母と私の魂」を帛してくれるよう寄進するとあるところから、母フィオルダリーザもすでに亡くなっている。その死はいつか分からない。ラムージョは、父がマルコの投

獄中に再婚したと書くが、これはこのフィオルダリーザのことを取り違えたものと考えられる。

まず「娘フィオルダリーザに2千リブラ」を遺贈するが、婚資としてであり、それまでそれを担保としてその利子を受け取る。さらに「公債1千リブラの利子」。ただしこれも結婚するまでの費用としてであり、結婚後はその公債とその利子は「私の男系相続人」に、それがない場合は「我が兄弟マルコ・ポーロ」のものとなる。この娘は、遺言執行人に名が挙がっていないところを見ると、まだ成人していない。次いで、「妻カタリーナに400リブラと衣類全て」とあるから、妻の名はカタリーナ・サグレド。次に、「マロカ婦人に100リブラ」とあるが、これが老マルコの子つまり従姉妹マロカのことか、それとも母か妻方の親族かは分からない。「我が庶出の娘パスクァに400リブラ」。その母親の名は分からない。これも結婚費用だが、もし本人が修道女になることを望む場合は、そのうち「200リブラを修道院に、残りの200リブラで公債を買い、その利息を生涯受け取るよう」と、修道院入りを期待している。その通りになったことであろう。「我が庶出の兄弟ステファノとジョヴァンニーノに500リブラ」とあり、ここで初めてマルコにさらに二人の腹違いの弟のあったことが知れるが、それ以上のことは記されていない²⁹。この500リブラは、もしどちらかが死亡したときはそっくり残った者の方に、もし結婚前に両方とも死亡したときは、私の男系相続人に、それがない場合はマルコ・ポーロにと、同じ但し書きがつく。「母方の伯父ジョルダノ・トレヴィザンに200リブラ」、「マルコ・ディ・トンバに100リブラ」、「フェリーチェ・パオリーノの妻フィオルダリーザに100リブラ」、「ニグロポンテに住む故ピエトロ・トレヴィザンの娘マロカに100リブラ」、同「息子フランチェスコに100リブラ」。これらはその名からしておそらく母方トレヴィザン家の親族と見られ、彼らも手広く商売する商業貴族だったのであろう。「ピエトロ・リオンの妻アニュータに100リブラ」とあるが、これがどのような関係かは分からない。最後に、年20リブラの利子を生む公債を買い、それをサン・フェリーチェ教会の司祭ピエトロ・パガーノに、その死後はその兄弟の聖職者レオナルドに与えて、父母と自分の魂を吊ってく

れるよう頼んでいる。

その他家や家具は全て自分の男系相続人のものとなるが、娘フィオルダリーザが結婚して男の子を生まない限り、「父からの相続分として私に属する所有分はマルコ・ポーロの所有に帰す」とある。その後フィオルダリーザが結婚したり息子を生んだ記録はなく、そのとおりとなる。さらに「兄弟マルコに2千リブラ、従兄弟ニコロ・ポーロに500リブラ、叔父マッフェオ・ポーロに500リブラ」、残りはマルコ・ポーロに。これらも、権利者が早く亡くなったり男系相続人をもたない場合は、ニコロへの500リブラを除いて全てマルコ・ポーロに渡すよう遺言されている。最後に、自分の遺産が現金と資産合わせて「1万リブラより少ない」場合は、娘の分を除いて同じ割合で減じるべきことを申し渡している。しかし彼はきっとそれ以上であることを確信しており、これからしても弟マッテオも十分に裕福だった。

若マッフェオは、その生年をガッロにしたがってマルコの誕生後で父ニコロの第1次東方出発以前、つまり1255-60年と考えると、この時40-45歳となる。すでに壮年であり、この時のクレータ行きがどのようないきさつで行われたのか明らかでないが、遺言を認めていることからして、長期に渡すことも予想されるものだったかも知れない。無事帰国したかも知れない。この遺言がラテン語訳されて残っていることからして、あるいはその「危険」が現実のものとなったのか。10年後の叔父マッフェオの遺言書ではすでに故人となっている。

<1301 従姉妹フローラ遺言状>

次に1301年12月14日付けの、父ニコロの妹フローラの「娘アウリア」の遺言状がある³⁰。マルコにとっては従姉妹に当たる。「マルコ・ボルドゥ」の妻で、サン・ジョヴァンニ・バプティスタ区在住。結婚してまださ程にならぬのか、「妊娠中」。この遺言はそのことと関係しているのであろう。遺言執行人は、「叔父マテオ・ポーロ」と「母フローラ・ザーネ」。遺贈の相手としてこの二人の他に、「親族〔従姉妹?〕トマジーナとマリーア、その他姉妹」の名が上がっているが、母方の親族の名はマルコを含めて誰も出てこない。「マリーノ・ボルドゥ」とあるのは義父のことか。この遺言の中で、

嫁入りの際に婚資として貰ったサン・ジェルヴァーシオ（トロヴァーズ）区にある土地を母フローラからまだ受け取っていないと申告していることが注目され、ポーロ家が同区の出であることを推測する一つの根拠となっている。

31

<1203 ピエトロ・ダーバノの書>

マルコに言及した最初の書は、1303年に書かれたパドヴァの自然学者ピエトロ・ダーバノの「哲学者ととりわけ医学者との違いの調停者」である。彼は、「赤道下でも人間が生存可能か否か」、ひいては南半球でも航海可能かどうかを確かめるため、ヴェネツィアに直接マルコを訪ねて話を聞いたという。その中でマルコは、「私がかつて知った最大の遍歴者にして熱心な探求者であるマルクス・ウェネトゥス」として紹介されている。彼はダーバノに対して、南半球ではマジェラン雲とおぼしき星雲が南極の下に見える一方北極星は見えなかったこと、を語っている。マルコの旅が実際に行われたものであるのかどうか今なお疑問視されるが、これらダーバノや後のピピーノら第三者による直接の証言は、彼らに対するマルコの話が自身の体験に基づくものかそれとも伝聞によるものか確定はできないにしても、疑うべきよりは信用すべき性格のものであり、その旅が本当であったことを間接的ながら支持するのではあるまいか。問題は、マルコが本当に東方に旅したかどうかであるより、中国を始めとするオリエントのあのように詳しい情報をどのようにして手にいれたか、であろう。その詳細さと正確さからして全て自分の経験と観察からだけとはとても思えず、必ず典拠があったはずである。

<1305 大評議会議事録>

次に、1305年4月10日付け大評議会議事録に、「マルコ・ポーロ・ミリオン」の名が記載されている³²。ヴェネツィアの対岸メストレのボノーチオなる者が、葡萄酒を密輸したかどでポスタエの船長たちから訴えられ、152リブラの罰金を課され、それを4年で分割して償うよう命じられた。その保証人として、「貴人ピエトロ・モロジーニならびにマルクス・パウロ・ミリオン Marcus Paulo Milion」の名が他数人と共に挙げられている。かつてはこれは旅行家マルコのこととされていたが、その下に「mortuus 死亡」と追記

してあり、そのことはこの「マルクス・パウロ」が保証人としての期間中、つまり1305-9年の間に死亡したことを意味することから、叔父の老マルコのことと考えられるようになった。1280年の遺言後さらに30年近く生き延びたことになる。いくつ年長であったかは分からないが、弟ニコロの死が1300年頃、マッテオは1310年頃だから、特に不思議ではない。また「ミリオン」(Million 百万)の名が伯父マルコにも付けられていることから、それがマルコだけの特別のものではなく、サン・ジョヴァンニ・クリソストモ区のポーロ家を他のポーロ家から区別するための称号ではないかと考えられるようになった。

<1306 従兄弟ニコロの記録>

1306年3月16日に、「サン・ジョヴァンニ・クリソストモの故〔老〕マルコの子〔若〕ニコロ・ポーロ」が、マルコ・ポーロに20リブラの借金のあることを認めた記録がある³³。老マルコがここでは「故人」となっていることから、彼の死は前述1305.4.10とこの1306.3.16の間となる。この借金が若ニコロのものかそれとも老マルコのを彼が受け継いだものか分からないが、これがもとで彼らがかのポーロの館を追い出されることは、後にみる。

<1307 FGグレゴワール版>

1307年にはマルコに係わる二つの書が出ている。一つは彼の旅行記のフランス語訳であり、もう一つは小アルメニアの君侯ハイトンの『東方史の華』である。

当時のフランス王フィリップ4世の弟シャルル・ド・ヴァロワは、1261年に崩壊したラテン帝国最後の皇帝ボードゥアン2世の娘カトリーヌを妻に迎えていた(1301)が、名目上とはいえ彼女がかの帝国の継承権を有することから、このシャルルもかつてのシャルル・ダンジューのごとくコンスタンティノーブルの再征服を狙い、利害の一致するヴェネツィアと同盟すべく、使者ティボー・ド・セポワを派遣してきていた(1305)。ティボーは、おそらく東方情報を求めてのことであろう、ポーロたちのことを聞き伝えて直接訪ね、旅行記の写本一本をマルコから手ずから献上されたという。この一般にグレゴワール版(FG)として知られるコピーはその序文に、それは1307年8月に作

成されたと記してある。

1298年にジェノヴァの獄でルスティケッロの手でなったというオリジナルは失われて発見されず、それに最も近いもの、すなわち最も古いテキストは一般にはパリ地理学会版(F)と考えられているが、それには作成年代は記されていない。ティボーが貰ったというコピーは、マルコ自身によって作られたものかそれともフランスに持ち帰って後誰かによって標準的なフランス語に訳されたものか確定しないが、旅行記のテキストのうち年号の記されているものとしてはそれが一番古い。

<1307 ハイトン『東方史の華』>

その同じ1307年8月、前述甥たちの跡目争いからんでキプロスに亡命していた小アルメニアの君侯ヘトゥムは、同島の王アモーリ・ド・リュジニヤンによって当時ポワティエにあったクレメンス5世の聖庁に派遣されていたが、その折に東方情報と新十字軍提言の書である『東方史の華』を口述して教皇に献呈した。名こそ挙げられてはいないがその書には、「美しさにおいてラテン語に似た文字」を有していること、「君主の印を押した四角い紙のお金」を使うこと、インドの宝石と胡椒、セイロン王の世界最大のルビーなど、マルコの旅行記からの記事が取り込まれていることが知られる。³⁴

<1309 TAトスカナ語版>

広く普及したもう一つの写本グループ、トスカナ語版(TA)に記されている年代は、1309年である。クルスカ写本「オッティモ」として知られる現フィレンツェ国立図書館写本TA¹は、「1309年に亡くなったミケーレ・オルマンニによってフィレンツェにおいて書き写された」との書き込みをとどめている。とすると、トスカナ語版の原本が作られたのはそれより遡る。これらの例は、ラムージョが言うほどではないにしても、実際マルコの書が評判となり多くの写本が作られ、また様々な言語に翻訳されて広く読まれ始めていたことを傍証する。

<1310 叔父マッテオ遺言状>

1310年2月6日には叔父マッテオの遺言状が作成されている³⁵。「サン・ジョヴァンニ・クリソストモ区」在となっているから、彼の一家もかのポーロ

の館に同居していた。作成者は、「サン・フェリーチェ教会の司祭にして公証人ピエトロ・パガーノ」で、若マッテオの時と同一人物である。このことは、同教会とポーロ家との何らかの昔からの関係を想像させ、ニコロら三兄弟の父を「アンドレーア・ディ・サン・フェリーチェ」とするラムージオに、一つの根拠を与えている。

遺言執行人は、「甥マルコとステーファノ」。とするとマルコの庶出の弟ステーファノもすでに成人しているから、その出生は1290年以前となり、その母（マリーア）とニコロの出会いが東方滞在中のこととなる。彼女がなに人か分からないが、洗礼名マリーアは誰にでも付けることができたから、モンゴル人あるいはひょっとして中国人であった可能性も出てくる。マルコも彼らとともに旅したことになるわけだが、旅行記にはそうしたことは一切記されていず、彼らに限らず父や伯父にも言及せず、自分一人が主人公になりたがるとの非難の根拠となっている。一方もう一人の甥ジョヴァンニーノが指名されていないのが、まだ20歳に達していなかったからかどうかは分からない。マッテオの妻マルタは、その名のないことからして、すでに死亡していたと見られる。

まず教会への十分の一税と借金が完済されることを型どおり述べた後すぐ続いて、「ヴェネツィア・デナリ125リブラ・アド・グロッソを所有しているが、それはタウリス〔クリミア半島〕で死亡したかつての我が召使いであったマルケットのもので、彼自身が死に際してその半分を庶子Maycuに、残りの半分をMaycuの母Jucaに遺贈したものである。そのお金を、でき得る限り、その使者が誰であれ、その権利を有すべき者に与えられること」を望んでいる。

この文面からする限り、そのいきさつは分からないが、召使いのマルケットからその内縁の妻と子に渡すべき金が自分の手に残ったままになってしまったのであろう、よほど気になっていたものと見られる。このマルケットが召使いだったのがどの時期かはっきりしないが、東方行以前のソルディアの兄弟商会時代と考えるのは、余りにも時が経ちすぎている。帰国時とすれば、トレビゾンダからの帰りそこに寄ったのか。帰国後マッテオが再びソルディ

アに出かけて商売をしていなければのことであるが、そうした記録はないし可能性も少ない。たんにヴェネツィアのポーロ家に召使いとしていたのが、クリミア半島に帰って後死亡したのか。いずれにしても母子 Juca と Maycu は、その見慣れぬ名からして現地人、アラン人かトルコ系モンゴル人ではないかと想像される。帰国後のマッテオについての情報はこの遺言と、ずっと後のピピーノの証言以外一切ない。

次に多くの教会や修道院に寄付した後、ムラーノ島の「サンタ・カタリーナ・ディ・マツアルボ（修道院）の我が魂の娘ジュリァーナとクララ姉妹に400リブラ」遺贈する。「我が魂の娘」とあるから彼女らが養女であり、すでに修道女となっていたことが分かる。財産が分散せぬよう娘を修道院に入れるのは、ヴェネツィアでは最も一般的な方策だった。

次に、「マルコに1600リブラ」で最も多い。もう一人の「甥ニコロ・パオロに1000リブラ」。ただし、彼がそれをうまく活用しない場合は、「その子マルコリーノ」に。また、「公債の中からマルコ・ポーロが私から借りている500リブラを私の代わりにニコロ・ポーロに返す」こと。また、「家にある私の所有に帰す宝石の半分とタルタル人のグラン・カンのものであった三つの黄金の牌」もマルコ・ポーロに。例の黄金の牌が何故3枚もマッテオの所有になっていたのか、よく分からない。そもそも、前後2回の東方行でポーロたちが計何枚の金牌をモンゴル政権から貰ったのか明確でない。またその後の行方も分からない。後のマルコの遺品目録では1枚だけである。珍しい価値高い記念品として親族の間で奪い合ったのか。これこそ三人が中国まで行った動かぬ証拠と言えそうだが、最初の旅行の時のものかも知れないし、2回目のものにしてもペルシャのカンからもらったものかも知れない。いずれにしてもしかし、もし今後ヴェネツィアに発見されれば、中世東西交渉史を飾る最も記念すべき遺品となることであろう。

トレビゾンダで没収された財産のことについてはすでに触れた。マッテオは帰国後ニコロや長兄の老マルコと共に新たに「兄弟商会」を設立した模様で、ニコロの死後はマルコとの共有になっている。もう一人の甥若マッテオについては、「特別のお蔭をもって生きていた」とあり、また遺言執行人に

挙げられていないところを見ると、1300年にクレータに渡ったまま消息を断ったか、あるいはこの時までには亡くなったものと見られる。「ステーファノ・ポーロの母マリーアに200リブラ」とあって、ここで初めてマルコの庶出の弟たちの母がマリーアであり、まだ生きていることが分かる。その「ステーファノとジョヴァンニーノに2000リブラ」で、等分すること。庶出であっても、甥たちの扱いは変わらない。「姪アニュジーナに公債100リブラの利息」とあるのは、兄老マルコの娘のことか。もう一人の「姪マロカに200リブラ」とあり、その夫の名がカステッロ・デ・アミーチであることが記されている。ソルディア在住とは書いてないところを見ると、この時までには引き揚げたのであろうか。さらに、「故アウリアの母フローラ・ザーネに50リブラ」。以上はしかし全て、もしそのとおりにならなかった場合はマルコ・ポーロの所有に帰すとされているのが注目される。3人で作った財産ということであろうか。

次に、「メッロに住む我が親族ブラーショ・ジルベルトに25リブラ」、「ネグロポンテに住むフランコッレに20リブラ」、「コンスタンティノーブルに住む我が親族マニビリアに50リブラ」とあるが、これらは全て妻マルタ方の親族であろうか。これらの親族に関連して、3人が帰路コンスタンティノーブルとネグロポンテに寄ったことが思い出される。その他、「ペトロ・デ・クアルテリスPetro de quarteris, バガードウことレオナルド Leonardo detto baghaduの借金」を帳消しにし、かつての「我が召使いマルティーノに30リブラ」、「召使いヤコブJacobに100リブラ、アンナに50リブラ、レーノに100リブラ、その子マルティーノに20ソルド、レーノの娘マルケジーナに10ソルド」と、使用人たちにも気を配っている。続けて、「私とニコロは、ニコロが死亡する前に家にいた全ての男女をあらゆる隷属の絆から解放した、・・彼らは永久に自由であることを全ての人に知って貰いたい」と述べている。しかし、「もし私の甥たちのもとにいたければいることもできる」とも言っている。これから、かのポーロの館には何人かの召使いや奴隷がいたことが分かり、ポーロ家がかなり裕福だったことが知れる。その中には、ペトロやヤコブといった名前から推測されるごとく、東方から連れ帰っ

た者たちもいたことであろう。もちろん当時のヴェネツィアにはすでに、とりわけ黒海周辺から送り込まれた家内奴隷がたくさんいたが。最初のマルケットもそうした一人だったか。

さらに、「コンスタンティノーブルのアルベルト・ヴァズムーロに350イペルペロ」、同じく「コンスタンティノーブルのアンセレートに25イペルペロ」の貸しがあり、その3分の1は自分のもの、3分の2はマルコのものである。マルコが3分の2となっているのは、父ニコロの権利を相続したためであろう。また、マルケジーノに400リブラの貸し付けがある（うち6サッジオは息子パオロから受け取り済み）。最後に、「マルコ・ポーロの娘たちに500リブラと投資から100リブラ」とあるが、名前は挙げられていない。

次に品物に移り、「三つの絹のカーテン」をマルコ・ポーロ、マルコリーノ（若ニコロの子）、甥のステーフアノとジョヴァンニーノに一つずつ遺贈する。「絹の」とあるところからして東方から持ち帰ったものか、よほど値打ちものだったのであろう。

その後、「サン・ジョヴァンニ・クリソストモにある土地と家の分割」に移る。それによれば、「全部で24カラット」³⁶、内「4.5カラットは甥ニコロ・ポーロのもの」で、老マルコから相続したものであろう。残り19.5カラットの内半分が自分のもの、残り半分はマルコ・ポーロと故〔若〕マテオ・ポーロのもので、父の故ニコロが彼らに遺したものである。自分の分〔9.75〕のうち4カラットをステーフアノとジョヴァンニーノ兄弟に、1.5カラットを若ニコロ・ポーロに、残りの4.25をマルコ・ポーロに遺贈する。しかしマルコが男系相続人なしに没した場合は、そのうち2カラットを若ニコロ・ポーロに、2カラットをステーフアノとジョヴァンニーノに、しかしマルコ・ポーロが生きてある限り好きなようにすることができる、と但し書きが付いている。したがって結果的には、マルコが14カラット、若ニコロが6カラット、ステーフアノとジョヴァンニーノが4カラットとなった。この分割は後に争いの種となる。残余の財産については、前出絹のカーテンと同じように四つに分けて受け取るべきことを述べて終わっている。

この老マッテオの遺言状は、ムールのテキストだと7ページ252行にも及ぶ

長大なもので、またその内容も上にみたごとく親族のみならず、使用人、知人、教会関係者ら全てに対して細かな配慮に満ちたものであり、そのことは叔父マッテオの高い知性と暖かい人柄、それに几帳面な性格を窺わせ、旅行中も克明な記録が彼によって作成されており、それがマルコによって用いられたのではないかと想像さす。

1310年は、ヴェネツィアがもった最初の本格的な反乱「ティエポロの謀反」が起こった年でもあった(6月15日)。これに、マルコの妻ドナータ・バドエルの兄弟たちが関わっていたことが知られている。ドナータはその姓からして貴族バドエル家の血筋に当たると推測されるが、バドエルは9-10世紀にかけてのヴェネツィアきっての古い家門パルテチパツィオ家の改姓名であった。バドエル家は、13世紀中頃当主マルコがパドヴァを僭主エッツェリーノ・ダ・ロマーノから解放するため派遣されたことにより、同地に大所領を獲得して、本土部に勢力を張っていた。この頃の当主バドエロ・バドエルは、教皇派であったことから、ドージェに対する反対派の指導者バイアモンテ・ティエポロに加担した。ドナータの兄弟ピエトロとアンジェロもこれに加わり、処罰されたことが記録されている。首謀者バドエロは処刑されたが、ピエトロ・バドエルは亡命し、アンジェロはヴェネツィア領内で船を艀装することと航海することを禁じられた。また、サン・ジェレミアのポーロ家の二人、フランチェスコとヤコベッロも反乱軍に加わり、追放に処せられた。マルコがどのように動いたかの記録はないが、おそらくは妻の親族の肩をもっていたことであろう³⁷。これに限らず、マルコの政治的・宗教的立場を証言する記録も一切ない。

この反乱とは関係ないであろうが、1312年3月17日付の公証人の証書があり、そこでは、「故ヴィターレ・バドエル」の兄弟「サン・パテルニアーノのマルコ・バドエル」が、「サン・サルヴァトーレ区」にあるマルコ・ポーロの「妻ドナータ・バドエル」が父ヴィターレから相続した土地が確かに彼女のものであることをマルコに保証し、その書類を送付している³⁸。また、その土地には今後一切自分は手をつけないといった意味のことを約束しており、おそらく妻が相続した地所をめぐるその伯父とマルコの間で争いがあ

ったのであろう。ドナータは、これからするとサン・サルヴァトーレ区のバドエル家の出身のようだ。サン・パテルニアーノ区とともに、サン・ジョヴァンニ・クリソストモとサン・マルコ広場の間の中心地区である。

< 1311 麝香の販売をめぐる裁判記録 >

1311年3月9日付けの請願裁判所の判決文にもマルコが登場する³⁹。「サン・ジョヴァンニ・クリソストモ区の貴族マルコ・ポーロ」と、「サン・アポリナーレ区のパオロ・ジラルド」の間で争われたもので、それによると二人はコッレガンツァを組み、前者が後者に麝香の販売を委託した。ジラルドはまず4月（前年？）に半リブラ（ポンド）、その後さらに1リブラ受け取った。値段は1リブラ（ポンド）あたり6リブラで、利益は折半という契約だった。ジラルドは最初の半リブラは売ったが、その売上金を払わなかった。後の1リブラは売れなかったため返したが、計ってみると1サッジョ（6分の1オンス）足りなかった。そこでマルコは、最初の売上金3リブラと後の足りない分の金額20デナロを要求した、というものである。裁判所はジラルドに、しかるべき期限までに代金と訴訟費用を支払うべきこと、でなければ投獄することを命じている。この裁判で庶出の弟「ジョヴァンニ」（ジョヴァンニーノ）がマルコの代理人となっていることから、その出生は1291年以前となり、彼も東方おそらく中国で生まれたことが確定的となる。

ここに出てくる麝香が東方から持ち帰られたものであることは明らかであろうし、後の遺品リストでもいくつか残っている。この裁判記録は帰国後ヴェネツィアでのマルコの商業活動を証言する唯一のものであるが、かつての東方での活躍と較べて余りにもささやかなものであることに印象づけられずにはいられない。年齢的にも60歳近く、もはやヴェネツィアの国債の利子で暮らす金利生活者となっていたのであろうか。

< 1318 兄弟ステーファノ・ジョヴァンニーノの記録 >

1318年(9.28)には、ステーファノとジョヴァンニーノ兄弟の記録が残っている⁴⁰。当然とはいえ、この頃には子どもたちの商売の方がずっと規模の大きなものとなっていた。

ステーファノは、自分の兄弟ジョヴァンニーノが「貴族セル・ビジーニ・

バゼイオの息子たちの船で4千リブラ以上の財産を携えてタナから帰る途中難破して死亡し、全財産を失った」ことを陳述し、そのため「貧乏になり、自分だけでなく、まだ6歳にならぬ一番上の子どもを始めとする5人の小さな子供たちの生活を支えることができない」ことを訴え、それゆえ「穀物1千ソーマ（袋）をプーリアから友好地に輸出」して稼いでもいいかと、市政府に特別許可を願い出た。

5人の子供があり、一番上がまだ6歳に満たないというのは信じ難いが、あるいはジョヴァンニーノの子供たちも含まれているのかも知れない。しかし彼が結婚していたかどうか、子供があったかどうかは分からない。しかし、この二人の兄弟が生まれたのは東方であろうと考えられるだけに、「タナ」への往来がどのようなものであったのか興味深い。この頃にはソルディアやカッファに代わって、アゾフ海ドン河口のタナが黒海・ロシア交易の拠点となりつつあった。ステーファノに対するこの許可は、翌1319年(5.22)に期限の延長が許可されている。

< 1319 若ニコロの記録 >

老マルコの子若ニコロがマルコに20リブラの借金のあったことは1306年の記録にみたが、それがどうもそのままになっていたらしく、「故[若]ニコロの子マルコリーノ」に父のその借金返済の義務が受け継がれたことと、その「元金20リブラとそれの2倍の罰金とその間の利息2割」のカタに、マルコリーノが父ニコロから相続した財産を差し押さえることをマルコに認める1319年7月2日の判決が残っている⁴¹。これからすると、従兄弟若ニコロはこの頃亡くなったようである。そしてマルコは、この権利をすぐさま実行に移す。

若ニコロが、例のサン・ジョヴァンニ・クリソストモのポーロの館の所有権を、父老マルコから4.5カラットと叔父マッテオから1.5カラットの計6カラット、すなわち全体の4分の1の権利を得たことは、1310年のマッテオの遺言状にみた。父若ニコロの死にともない、その権利は当然その子マルコリーノに相続されたであろう。マルコの訴えにより裁判所は、上の判決に基づいて同1319年9月10日、マルコリーノが相続したその「二つの所有権」（12の部屋と1つの台所）を「55リブラ」と評価し、それが前述の借金を下回るこ

とから、したがってその所有権はマルコとステーファノにあることを認めた⁴²。マルコリーノとその家族は、おそらくその後すぐかの館を追い立てられたことであろう。

< c. 1314-20 ピピーノのラテン語訳 >

この頃、早ければ1314年頃から遅くとも1320年頃までの間に、フランチェスコ・ピピーノのラテン語訳が作成されている。このボローニアのドメニコ会修道士は、そこに付された著名な序文による限り、ポーロ家の人々と知り合いであったかも知れないと見られている。もっともそこでは、マルコや父と叔父たちが信心深い人たちでありその話が信用に足るものであることを強調しているだけで、それ以上の情報の提供はない。そのラテン語訳からは数多くの写本が作られ、彼の狙いどおりヨーロッパ中に広く受け入れられた。その一本が後にコロンブスの手に入り、ジパングを求めての航海がもう一つの大陸の発見となったのは知られるとおりである。ピピーノは、1314年で終わっている自分の主著『年代記』にも、かの旅行記から多くの記事を取り入れているが、著者マルコについての紹介はない。⁴³

< 1324 マルコ・ポーロ遺言状 >

そして生前では最後のものが、1324年1月8日のマルコ自身の遺言書である⁴⁴。遺言執行人は、妻ドナータと3人の娘ファンティーナ、ベッレラ、モレータ、その内上二人はすでに結婚し、末のモレータは未婚である。が、執行人に名が挙げられているところから、その誕生は皆1304年以前となる。遺産のほぼ全てが彼女ら4人の間で分割すべきことが遺言されており、異母兄弟のステーファノ、マルコリーノを始めとする甥姪たちや他の親族への遺贈はいっさいなく、前述のポーロの館を独占した裁判記録とあいまって、晩年のマルコあるいは妻ドナータの吝嗇と強欲が指摘される所以となっている。また、良きにしろ悪きにしろこの頃には有名人となっていたと想像されるが、その死を記した記録は他にはない。

< 1366(1324) 遺産目録 >

最後に、日付は1366年7月13日だが、マルコの死のすぐ後に長女ファンティーナの夫マルコ・ブラガディンによって「俗語」で作成された遺品目録があ

る⁴⁵。後に夫の死に伴いファンティーナが、父から相続した財産を夫の実家から取り戻すために提出したもので、「小さな入れ物に入ったナイフ2本」(s. 3, 6)から始まって、「中小の石壺8」(s. 6)まで175品目が列挙されている。大部分は珍しい織り物や宝石などの貴重品か商売の品ではないかと思われるもの、ベッドやカヴァーなどの家具調度、ベルトや指輪などの身の回り品だが、東方から持ち帰ったのではないかと推定されるもの、あるいはその旅を偲ばせるものも多い。

その最たるものが「大きな金の命令の札」で、言うまでもなく、グラン・カーンから授かったという黄金のパイザであろう。評価も全ての中で最も高く、20リブラである。ただし1個となっており、叔父マッテオの遺言状との差が疑問を呼ぶ。マルコがヴェネツィアでも商売の元手とした「麝香の入った壺」も、3項目(計1. 21, s. 14)に挙げられている。「大黄1袋」(s. 5)も見える。「宝石と真珠をちりばめた金のかぶり物」(1. 14, s. 5)をオルシュキは、それが極めて高く評価されているところから、コカチン姫から貰ったものではないかと想像した⁴⁶。他に「ルビーの指輪3とトルコ石1」(1. 6)などもあるが、宝石商人とのイメージにはんして貴金属類が意外と少ないのは、例のポーロの館を購入するのにあらかた使ってしまったためか。最も多いのが織物で、東方産と思われるものでは、「カタイの白薄絹地2」(1. 2)、「カタイの黄薄絹地1」(1. 1)、「ナシチの金糸の織物1」(1. 2, s. 10)、「金糸の錦織1」(1. 1, s. 3)、「絹の錦織1」(1. 1, s. 3)、「カモシカ皮と薄絹地のタルタル風刺繍のカヴァー3」(1. 12)など、さらには「奇妙な動物の毛の織物1」(s. 16)、「馬の手綱2」(s. 2)、「ロザリオの珠1」(評価なし)といったものもある。また、「コッレガンツァその他の書類2袋」があるが、残念ながらその中味は分からない。

これらは財務官によって、計306リブラ15ソルドディ2デナリと計算された。また、これらも含めてマルコの遺産は、総額12, 147リブラ10ソルドディと評価され、娘たちはその3分の1ずつ、つまり約4千リブラ余の権利を得たのであった。^[47]

3 おわりに

東洋と西洋の直接的な形での接触は13世紀に始まる。それまでとてその間にある地域、西からいえばビザンティン・ロシア・アラビア・ペルシャ・インド・中央アジアの国々、とりわけ海路のイスラム商人を介して連鎖的につながっていたであろうが、その両端、東の中国と西のヨーロッパを考える限り、それらはいくまで間接的なものであった。それに我々は、その間に介在した国々の記録が少ないこと、あるいはそれに容易に入り込めないこともあって、その実態を知らないでいる。

これに対して13世紀の直接的接触は、この両端自身の動きによってもたらされたものであった。一つは東からのモンゴルの拡大であり、もう一つは西からのヨーロッパの進出である。

13世紀始めジンギス・カーンのもとに強大となったモンゴルは、遊牧民族の特性をいかんなく発揮して、同世紀半ばには中国からペルシャにいたる大陸中央部をほぼ全て支配下に置いた。これで、それまでその往来を阻んでいた障害が取り払われた。一つは各地に存在していた土着の政権という政治的・軍事的障害であり、彼らは全てモンゴルに滅ぼされるか、その統治下に入った。もう一つは中央アジアの広大な砂漠や険阻な高山という物理的障害であり、モンゴルの名高い宿駅制度の助けをえて越えられるようになった。いわば、ユーラシア大陸の中央部にまっすぐで平坦な道が付けられたと言ってよい。舞台はこうして整えられた。

そこへ進出してくるのが西ヨーロッパである。5世紀にローマ帝国を倒した「蛮族」ゲルマンは、9世紀始めシャルル・マーニュのフランクを中心として「ヨーロッパ」を形成した。その後内陸部で発展したヨーロッパは、眼を外に向け、地中海を支配していたイスラムに対して反攻を開始する。それが11世紀末に始まる十字軍である。2世紀にわたるこの運動を通じて、エルサレムこそ取り戻せなかったが、彼らはそれ以上のものを得た。その外その東にさらに広大な世界が広がっていることを知ったのである。しかもそこからは、彼らの憧れてやまぬ絹や、食料保存のためどうしても必要とする香辛料

がやって来ていた。しかしその流通は、その間に介在するイスラム商人の手に握られていた。となると、何とかそれを直接手にすることはできないかと考えるのは当然のことであった。が、シリアをイスラム勢力に抑えられて、大規模に内陸部に進出することはできなかった。

そうした状況の中で、最も有利な位置を占めていたのがヴェネツィアであった。背後にヨーロッパという大市場を控えたこの海洋都市は、まずアドリア海を掌中にし、次いで老大国ビザンティンに取り入ってその商業を独占し、折りよく始まった十字軍運動を利用してコンスタンティノーブルのみならずエーゲ海の島々を拠点化し、東地中海ほぼ全域を勢力下に置いた。

そこへ東から展開してきたのが前述モンゴルであった。彼らはロシアを制圧した後ヨーロッパにも向かったが、深い森林や稠密な都市に騎馬での前進を阻まれ、またオゴタイの死という偶然もあってその征服を諦めた。ペルシャでは、アッバース朝を倒した後シリアからアフリカを狙ったが、マムルークという従兄弟たちにその前進を止められた。一方ヨーロッパは、この突然の異民族の出現に驚きうろたえながらも、まず布教を名目にカルピニ、ルブルクら修道士たちを偵察に派遣して情報を集め、対イスラムのための軍事的提携を考えた。また商業的には、ペルシャのイル・カン国を通じてのインドや南海諸島との、南ロシアのキプチャク・カン国を通じての中国との直接交易の可能性を模索した。

ポーロが生きたのは、こうした時代と舞台であった。彼らの2回の旅はまさにその証言と言ってよい。コンスタンティノーブル、黒海・ソルディア、ベルケ、フラグ、バヤン（伯顔）、グラン・カン・フビライ、小アルメニア・ライアス、クレメンス4世、グレゴリウス10世、バイバルス、アルゲン、ガザンと、その旅行記に出てくる人物や土地はどれをとっても一方の主役たちである。しかも、史実とよく一致する。帰国後もジェノヴァの獄、ピーサの人ルスティケッロ、シャルル・ド・ヴァロワの使者ティボー、ドメニコ会士ピピヌスと道具立ては揃っている。

とこのように、マルコの行動の軌跡は当時の歴史によく沿っている。否、一人の人間としてそれをはるかに越えている。中世末期にあって25年の長き

を東方に旅し、当時最大の君主グラン・カンの側に仕え、元朝治下の中国で活躍し、陸路と海路でユーラシア大陸を一周した者なんぞ、ヴェネツィアにはもちろんヨーロッパにも一人としていなかったはずである。自らその書に記すとおり、「我らが始祖アダムよりこのかた・・・かくも広大なる世界と大いなる驚異を見聞した者」は、古今と東西とを問わず誰もいなかった。後世、「最大の旅行家」と称されるのも、謂れなきわけではなかった。

ところがである、マルコのそうした行動を証拠づける公式の記録は、以上にみてきたごとく、一つもない。旅行中と帰国後の出来事に彼の名が出てこないこと以上に不思議なのが、ジェノヴァからの解放後公式の文書に一切登場しないことである。その書や旅の話しが広く知られるところとなっていたことは、すぐ多くの写本が作られていることや、ダーバノとの対話、ティボー・ド・セポワの訪問、ピピーノによる翻訳などから明らかであろう。死後になるが、ヴィッラーニやボッカッチョも言及している。それに、彼の希有な経験と東方に関する豊富な知識と情報は、ヴェネツィアにとって、とりわけその商業界にとって貴重で有益だったはずである。にもかかわらず、彼が公職に就いた記録はないし、ヴェネツィア当局がそれを活用しようとした形跡もない。その記事や体験がでたらめな「作り話」として信用されなかったから、というのは後世の伝説である。その真偽を見極められないほど当時のヴェネツィア人が東方に暗かった、とはとても考えられない。にもかかわらず、政府も商業界も貿易団や使節団を派遣する動きを見せていない。かの旅行記を隠匿することはなかったかわりに、保護することもしなかった。かくてヴェネツィアは、ジパングを探してのアメリカ「発見」のチャンスを、ライヴァル都市ジェノヴァの人コロンブスに譲ってしまった。

これに対して私的な記録は、これまた上に見たごとく、数多い。13世紀から14世紀にかけて生きた一介の市民で、これほど多くの記録を発掘された人物も珍しい。その家系譜も数代後までほぼ明らかにされている。それは、自分たちが偉大な先達を持っていたことに気付いた後の近代のヨーロッパ人の手によるものであった。ところが、その数多い私的な記録の中でも、あの東方への旅に触れたものは叔父マッテオの遺言書での黄金のパイザへの言及し

かなかった。マルコ自身はどこにも書き残していない。

25年にわたってアジアを駆けめぐりユーラシア大陸を一周してきた人物が、本当に残りの25年間で、東方から持ち帰った珍奇な品々元手のみみっちい商売と、家の所有権をめぐる親族相手の裁判沙汰に、費やしてしまったのであろうか。それとも、記録に書きとめられなかっただけ、あるいはまだ発見されていないだけなのであろうか。彼の生涯もまた、その書に劣らず謎である。

【註】

[1. 初出：《大阪国際女子大学紀要》25号-2、1999、pp. 45-73。再録：拙訳『世界の記』名古屋大学出版会、2013、pp. 753-91。]

参照文献は、(一) 及び拙稿「ルスティケッロ・ダ・ピーサ -- マルコ・ポーロ旅行記の筆録者」（本誌24-2号(1998)pp. 1-48）で挙げたものの他（末尾 [] 内略称）：

8) *Venezia e l'Oriente*, a cura di Alvise Zorzi, Milano Electa 1981. [Venezia e l'Oriente]

9) Alvise Zorzi: *Vita di Marco Polo*, Milano Rusconi 1982. [Zorzi]

10) Henry H. Hart: *Marco Polo Venetian Adventurer*, Univ. of Oklahoma Press 1967. [Hart] (ヘンリー・H・ハート(幸田礼雅訳)『ヴェネツィアの冒険家マルコ・ポーロ伝』新評論 1994. [ハート])

古記録は、Yule:II. 507-21, Orlandini:23-68, Moule:521-95, Gallo:172-93, Gallo¹:317-25による。

2. 妻と娘たちによる遺産相続の手続き(1324.2.8. Gallo:174)、マルコの遺品目録(1366.7.12. Orlandini:62)。

3. Fで「12歳」(F:7)となっているのは単なる誤写(Yule:I. 19)。

4. ゴルジによれば、1168年にある商船の船長のサンティ・ジェルヴァーゾ・エ・プロターゾ区のマルコ・ポーロなる者の記録があり、これが父ニコロたち3兄弟の祖父(Zorzi:14)。

5. カルピニ／ルブルク（護雅夫訳）『中央アジア・蒙古旅行記』光風社出版 1994 pp. 132-7. ちなみにカルピニも、自分の東方行(1245-47)を証明してくれる人

物として、帰路にキエフで出会った「コンスタンティノーブルの商人たち」を挙げており、その中に「ヴェネツィア人マニュエル」がいる(同 pp.89-90)。[カルピニ「モンガル人の歴史」、ルブルク「旅行記」拙編訳『原典 中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会 2019。]

6. Critchley:5-6.

7. カルピニ／ルブルク 前掲書 「ポーランド人ベネディクト修道士の口述」 p p.124-5. [同上]

8. フィリップと結婚したイサベルはナポリの卵城に住んだが程なく離婚し、次に騎士フルランス・ド・エノーと結婚した。その死後フィリップ・ディ・サヴォイアと結婚し、サヴォイア家に「アカエア君主」の称号をもたらししたが、領土はアンジュー家のものとして残った(Zorzi:297)。

9. Orlandini:p.4, n.2; Gallo¹:316-7.

10. Martin da Canal:*Les Estoires de Venise*, a cura di Alberto Limentani, Firenze Olschki 1972.

11. Benedetto:XXXII (拙訳⁴:185).

12. 当時のアークレの地図は、Yule:I.18, *Venezia e l'Oriente*:55 (Marin Sanuto il Vecchio (1270-1343)の*Liber secretorum fidelium curcis*(1306)より)。

13. ムラトーリによれば、テバルドはその頃イタリア本土に滞在しており、ブリンディジからアークレに渡った。したがってエドワードには同行していない(Muratori:601)。

14. ゴルジによればこの時の3人の使者は、Reginald Russell, Godfrey Welles, John Parker (Zorzi:79)。

15. ムラトーリによれば、教皇に選出されたテバルドは同年12月か翌年1月にブリンディジに着き、「カプアからシャルルに伴われて2月19日ヴィテルボに着いた」(Muratori:597)。

16. Cfr. 前掲拙稿「ルスティケッロ・ダ・ピーサ -- マルコ・ポーロ旅行記の筆録者」。

17. Lazari:429-31; Moule:523-5; Yule:I.25-6.

18. ユールは「500リブラ」と考えている(Yule:25)。

19. 「永楽大典一万九千四百十八頁十五下：（至元二十七年〔1290年〕八月）十七日尚書阿難答、都事別不花等奏：平章沙不丁上言：今年三月奉旨遣兀魯、阿必失呵、火者取道馬八兒、往阿魯渾大王位下。同行一百六十人、内九十人已支分例；余七十人聞是諸官所贈遺及買得者、乞不給分例口糧！奉旨：勿與之！」 Yang C hih-chiu 楊志玖 & Ho Yung-chi 何永佶, 《Harvard Journal of Asiatic Studies》 Vol. 8 1945-47 p. 51. [原文旧漢字]

20. Cfr. 拙訳³: (1)156.

21. Cfr. 拙訳²: (2)268-73.

22. Sergej Pavlovic Karpov: *L'Impero di Trebisonda Venezia Genova e Roma 1204-1461*, Roma Veltro 1986, pp. 75-7.

23. Moule: 528 d. 2a.

24. ゾルジは、ポーロたちがこの機会に、ミカエル8世の庶出の娘でアバガに嫁いでいたが、夫の死とともにコンスタンティノープルに帰って修道女となっていたマリーア・パレオロゴスに出会いに行ったかも知れない、と想像している (Zorzi: 291-3)。

25. Gallo¹: 325.

26. Gallo¹: 315.

27. Moule: 325-8 d. 2; Yule: I. 64-5.

28. オルランディーニは、遺言執行人に老マルコの名のないことから、その死をそれ以前(1295-1300)と考える (Orlandini: 2)。

29. ムールは、「ニコロ・ポーロの寡婦マリーアの子 Bomondinus と Canatus」の名を記した大評議会記録(1304. 3. 18)を紹介しているが、これがマルコの父ニコロと妻マリーアのことか疑問視される (Moule: 528 d. 2b)。

30. Orlandini: 23-5 d. 3.

31. 1140年にサン・ジェルヴァーゾ区に住むジョヴァンニ・ポーロとその妻アウリアが、トレヴィジアーノにある自分たちの田畑を教会に寄進した記録があり、「アウリア」という名がヴェネツィアでは珍しいことが指摘される (Zorzi: 11)。

32. Moule: 528-9; Yule: II. 511.

33. Orlandini: 25 d. 4 (要約のみ、原文なし)。

34. 細部は大きく変えられているが、マルコのジパング遠征からと思われる記事のあることも知られる(第2巻第12章「モンケ・カーンの死」：拙訳²:(1)119).

35. Orlandini:25-31; Moule:529-36.

36. 「カラット」は1オンスの24分の1で、24進法の単位。今でも宝石や金に用いられるが、当時は所有権や持ち株の計算にも用いられた(Zorzi¹:24)。

37. 次女ベッレラはベルトウッチョ・クエリーニに嫁いでおり、クエリーニ家も反乱の首謀者の一人だった。

38. Orlandini:32-3 d.9.

39. Yulle:II.511-2.

40. Orlandini:35 d.12.

41. Orlandini:35 d.13(要約のみ、原文なし)。

42. Moule:536-9 d.14; Orlandini:35-6 d.4(同)。

43. 前掲拙稿「ルスティケッロ・ダ・ピーサ」:38-9.

44. Lazari:435-7; Yule:II.513-5; Moule:539-41 d.18; Ciccuto:60-2(イタリア語訳);拙訳¹:(1)95-6.

45. Orlandini:56-67 d.69; Moule:554-8 d.69.

46. Olschki:103-4. ()内のlはリブラ、sはソルドを表す(いずれもアド・グロツソ)。1リブラは20ソルディ。

[47. ごく最近、マルコ・ポーロの名の見える新たな記録がヴェネツィア国家古文書庫に発見された(II Messaggero紙 2019.11.19)。ジョヴァンニ・ダッレ・ボッコレGiovanni dalle Boccoleの遺贈の、サンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロSanti Giovanni e Paolo修道院の説教師会士たちによる受領に関わる1323年付文書で、その証人の中に'Marco Paulo de confinio Sancti Iohannis Grisostomi'<サン・ジョヴァンニ・グリソストモ教区のマルコ・パウロ>の名が記されている。また、その説教師会士の名簿の中には、翌年の彼の遺言状の中に挙げられているBenevenuto [Benvenuto?]とCentorio [MouleではTentorio]の名が見える。(友人Gianni Tripodiより提供)]



図2 エルサレムで聖油と書簡を受け取って出発するポーロたち
(出典不明、mavenise.blogspot.com より)

【再録】

Dino Buzzati, GRANDEZZA DELL'UOMO

ディーノ・ブツァーティ
「人間の偉大さ」

暗い牢獄の扉が開き、髭を生やした小柄な老いぼれを番人たちがその中に放り込んだとき、日はもうすっかり暮れていた。

老人の髭は真っ白で、ほとんど背丈よりも長かった。牢獄の重苦しい薄暗がりの中でそれがかすかに光り、中にいる悪党どもにある種の印象を与えた。

しかし暗闇のせいで、老人は初めは、その洞穴のようなところに他に人がいることに気づかずに、尋ねた、「誰かいるのか？」

あざ笑う声やうめき声が返ってきた。そのあと、この場所の作法にのっとり、それぞれが自己紹介した。

「リッカルドン・マルチェッロ」、しわがれ声と言った、「窃盗常習」

二番目の声は、同じく十分に陰気で、「ベツェダ・カルメーロ、詐欺再犯」

次いで、「マルフィ・ルチアーノ、強姦」

「ラヴァターロ・マックス、無罪」

一斉に大きな笑いが起こった。その冗談は大いに受けた。ラヴァターロはもっとも有名な盗賊の一人であり、血にまみれていたことを皆知っていたからだった。

続いて、さらに、「エスポジト・エネア、殺人」、その声は誇らしげに震えていた。

「ムッティローニ・ヴィンチェンツォ」、それは勝ち誇るような調子の声だった、「父親殺し……。で、お前は？ 老いぼれのノミ野郎！」

「わしは……」、と新参加者が答えた、「よくは分らんが、わしを捕まえて、身分証を見せろと求められたが、そんなものは一度も持ったことがないんだ」

「それなら浮浪罪だ、フン」、中の一人がバカにして言った。「で、お前の名前は？」

「わしは……モッロだが、エヘン……。いつも大モッロと言われている」「大

モッコか、こいつは悪くないな」と、よくは見えない奥の方から一人が言った。

「お前には少しでかすぎる、そんな名前は、十倍でかい」

「本当にそうなんだ」と、老人はとても物静かに言った。「しかし、わしのせいではない。バカにしてこんな名前を押し付けたんだよ、わたしにはどうしようもない。それに、面倒な事が起きる。たとえば、かつて・・・しかし話せば長くなる・・・」

「さあ、さあ、吐き出せよ」、悪党どもの一人が荒っぽく煽った、「時間ならたっぷりあるぜ」

皆それに同意した。牢獄の陰気な退屈さの中では、どんな気晴らしでもお祭りだった。

「では」と老人は話し始めた、「ある日町を、その名は言わぬ方がよかろう、歩いていた時のこと、ふと見ると大きなお屋敷があつて、召使いたちがありとある神の恵みを担いで門から出入りしていた。お祝いでもあるのだろうと思って、わたしは施しをもらおうと、その屋敷に近づいていった。すると、やにわに身の丈二メートルを超す大男に首根っこをつかまれた。《盗人だ、こいつは》と大男は叫んだ。《きのう、ご主人の鞍飾りを盗んだ泥棒だ。よくもずうずうしく戻ってきたな、今度こそとっちめてやる。》《わしが?》と、わたしは答えた。《しかし、わたしは、きのうはここから少なくとも三十マイル離れたところにいたのに、そんなことがどうしてできるんだ?》《お前をこの目で見たんだ、お前が鞍飾りを肩に担いでずらかるのを見たんだ!》そして、わたしを屋敷の中庭へ引きずって行った。わたしはひざまずいて言った。《きのうは、ここから少なくとも三十マイル離れたところにいたし、この町に来たのも初めてだ。この大モッコが申します》《なんだと?》、その乱暴者は目を丸くして見つめた。《この大モッコが申します》、とわたしは繰り返した。逆上していたその男は、突然笑い出した。《大モッコだと? みんな来てみろ。このシラミ野郎が大モッコと名乗ってるぜ》、そしてわたしに向かって、《お前は大モッコとは誰か知っているのか?》《自分の他には》、とわたしは答えて、《他には知らん》《大モッコとは》と、大男が言った。《わたしらのお偉いご主人様に他ならぬ。おい、乞食野郎、その名前をかたるとは! ひどい目に会うぞ、だけど、ほら、ご主人様がお出でだ》

そのとおり、叫び声を聞きつけて、お屋敷の主人が自ら中庭まで出てきた。この上もない金持ちの商人、その町いちばんの、いや世界でいちばんの金持ちだった。近寄って来、尋ね、見つめ、笑い、わしのようなみすぼらしい貧しい者が自分と同じ名前だということが彼を愉快にさせた。召使いにわしを放すように命じると、中に招き入れ、宝がいっぱい詰まった広間を見せてくれた。金や宝石が山積みになった、嚴重に防備を施した部屋にまで連れて行った。そして、食事までさせてくれたうえ、わしに言った。

「こんな事は、おお、私と同じ名前をもつ年老いた物乞いよ、ほんとに異例なことだ。というのも、インドを旅した時、私にも全く同じことがあったからだ。私が市場へ品物を売りに行ったときのことだった。私の持っている珍しい品物を見て、まわりにたちまち人だかりができ、そして、口々に私が何者で、どこから来たのかを尋ねるのだった。‘大モッコだ’と私は答えた。すると、彼らは険しい顔つきで、“大モッコだと？ お前さんの偉大さとはいったい何なんだ、平々凡々たる商人よ？ 人間の偉大さは知性にあるのだ。大モッコはただ一人、そして、この町に暮らしている。そのお方は我が国の誇りだ。このペテン師め、お前のホラをわからせてやる。”そして、わしを捕らえて縛り上げると、その存在も知らなかったそのモッコのところへ連れて行った。その男は、いとも名高い科学者で、哲学者で、数学者で、天文学者で、占星術師で、まるで神のごとく崇められていた。幸いすぐに誤解が解けて、彼は笑い出し、わしを自由にさせ、自分の実験室や天体観測所に案内して、すべて自分が作り出したさまざまな装置を見せてくれた。そして、最後にこう言った。

「こんな事は、おお、異国の高貴な商人よ、たいへん異例なことだ。というのも、私がレヴァントの島々に旅した時、私にも全く同じことがあったからだ。研究のためにその火山の頂上に向けて歩き始めたときのことだった、一団の兵士が異国の服装をした私を怪しんで止め、何者かと尋ねた。私が名前を名乗るや、たちまち鎖をかけられ、町へ引きずって行かれた。“大モッコだと？” “お前の何が偉大なんだ？ 哀れな小先生よ？ 人間の偉大さとは英雄的な武勲にあるのだ。大モッコはただ一人、この島の主で、かつて陽光に剣をきらめかせた最も勇敢な兵士なのだ。その御方は今お前の首をはねさせることになるだろう”こうして、彼らは私をその君主の前に引

きずって行った。彼は恐ろしい面構えの男だった。幸いなことに、説明すると、その恐ろしげな武人は、この特異な偶然の一致に笑い出し、私の鎖を解き、豪華な服をくれたうえ、王宮に招き入れて、遠近の島々の全ての民に勝利した輝かしい証拠の品々を見せてくれた。そして、最後にこう言った。

「こんな事は、おお、私と同じ名前を持つ著名な科学者よ、何とも異例なことだ。というのも、エウローパと呼ばれるはるかな遠い土地で戦っていた時、私にも同じことがあったからだ。兵隊を率いて森の中を進んでいたとき、粗野な山人たちに出会ったのだが、彼らは私を見て尋ねた。“わしらの森のしじまに武器の轟を持ち込むお前は、誰だ?” “大モッコだ”、と私は言った。その名前だけで奴らは吃驚すると思った。ところが、彼らは哀れむようにほほ笑んで言った。“大モッコだと? 冗談を言いたいのか、お前のどこが偉大なのだ、己惚れた武人よ? 人間の偉大さは、肉体のみすぼらしさと精神の高尚さにあるのだ。大モッコは世界にただ一人であり、そのお方のところへこれから案内してやる、お前さんが人間の真の栄光を見られるようになる。”そして、人里離れた谷あいにも私を連れて行った。そこのみすぼらしい小屋には、ぼろをまとって、真っ白の髭を生やした小柄な老人がいて、自然を眺め神を崇めながら時を過ごしていた。正直に認めて、いままでわしは、このような穏やかで満ち足りた、そしてたぶん幸せな人間を見たことはなかった。しかしわしには、本当のこと、人生の道を変えるにはもはや遅すぎた」これが、島の大王が博識の科学者に語り、その科学者が大金持ちの商人に話し、それからまたその商人が、施しを求めて屋敷の前に現れた貧しい老人に言った話だ。みんなモッコという名で、そして、皆がそれぞれの理由で“大”と呼ばれていたんだ」

さて、老人が話し終わると、暗闇の牢獄の中で、ならず者の一人が尋ねた。「とすると一と、俺の脳に麻くずがいっぱい詰ってるんじゃないとしたら、小屋にいたそのみすぼらしい老人、皆の中で一番偉大なのは、お前さんに他ならないってわけか?」

「ああ、息子たちよ」と、髭の老人は肯定も否定もせずにつぶやいた、「人生とは、何とも魔訶不思議なものよ!」

すると、話を聴いていた悪党達はしばらく黙り込んでしまった、というのも、極道の人間にも少なからず考えさせる何かがあったからである。

(1. 20世紀のイタリア人作家ディーノ・ブッツァーティに、マルコ・ポーロとその周辺のことどもに想を得たのではないかと思われる短編がある。本誌第1号に掲載したが、ここに再録する（訳文に若干の変更がある）。敢えてモデルを探せば、商人はマルコ・ポーロ、科学者はレオナルド・ダ・ヴィンチ、武人はジンギスカンではあるまいか。老人は、キリストや仏陀あるいは作者自身などではなく、普通の人間、人間皆ではないか。)